



Title	進路指導の転換期における高校生の職業意識 : 北海道S市を事例に
Author(s)	浅川, 和幸; ASAKAWA, Kazuyuki
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 98, 37-68
Issue Date	2006-06-30
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.98.37">https://doi.org/10.14943/b.edu.98.37</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/14431">https://hdl.handle.net/2115/14431</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	98_37-68.pdf



# 進路指導の転換期における高校生の職業意識

— 北海道S市を事例に —

浅川 和幸\*

## Occupational Consciousness of a High School Student in a Turning Point of Vocational Counseling

Kazuyuki ASAKAWA

【要旨】北海道S市の三つの高等学校の3年生を対象に職業意識の分析を行なった。主成分分析からは、三つの職業意識が明らかになった。「貢献琢磨意識」、「転職獲得意識」、そして「経済的安定意識」である。職業意識の中心に「専門を磨く」や「社会貢献」があった。またクラスター分析からは、四つの職業意識類型が明らかになった。二つはこの「貢献琢磨意識」に強く影響された「貢献琢磨」型と「安定琢磨」型で、後者は「経済的安定意識」の影響も受けていた。残りの二つは、全般的に職業意識の高い「すべて望む」型と、全般的に職業意識の低い「期待しない」型である。この二つは現れ方は違うが、自分の適性把握と将来の目標発見に困難を抱えていた。進路指導からキャリア教育への転換において、勤労意識の形成が重視されているが、本稿の分析からは、確かに一部の生徒はそれを必要としていること、さらに生徒の多くはもっと具体的な職業の情報と技術・知識も求めていることが明らかになった。

【キーワード】職業意識, 進路指導, キャリア教育

### 1. 論文の課題と限定

高校生の進路意識や職業意識は、大きく変わったといわれている。この変化を背景として、高校進路指導の現場では、進路指導からキャリア教育へ、という原理上の転換が行なわれようとしている。本稿の課題は、北海道S市の高校生を対象とした実態調査から、高校生の職業意識の構造と論理について明らかにすることである<sup>1</sup>。

\* 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座助教授（教育社会学研究グループ）

<sup>1</sup> 本稿において職業意識という言葉は、広い意味での職業と職業生活に対する見方・考え方を指す。日本の労働現場の状況をみれば、「職業」という言葉は不適當だという批判が上げられるだろう。確かに、「職」の語がもつ具体的な職種の意味は、幾つかの職業を除いてあてはまらないことは筆者もよく知っている。そのため「職業」は「勤労」に置き換えられがちである。しかしながら、これからの若年労働市場の展望を考えるなら、約三分の一が所属することになる自由労働市場を、幾つかの職業別に組織することも考えうるかもしれない。そして生徒にとっては、進路意識の形成という点で、職業を軸とすることは、将来の人生のイメージを具体的に作る。例えばインターンシップも、勤労意欲を養うだけであれば、やらせることは何でもよいだろうが、将来の職業生活を考えさせることを目的とするならば、生徒が希望する職業にできるだけ近いもののインターンシップをさせる方がよいだろう。生徒が自分の職業適性を判断する基準ともなろう。またこのような職業を重視する考え方は、「学校における職業訓練を企業内で必要なものに直結させる」のか、それとも「企業外での訓

しかし本稿は、高校生の職業意識の解明を課題にしているといっても、現在の高卒就職の苦境の原因が、彼ら／彼女らの職業意識だけにあると考えているわけではない。学校から企業への移行の仕組み自体が歴史的に終焉を迎えている時代的な背景や、彼ら／彼女らの職業選択が自己実現に強く促されたものとしている文化の問題を、無視できないからである。多少補足しておこう。

まず前者について。進路指導の基盤であった学校経由の「広域職業紹介」<sup>2</sup>は部分的な修正<sup>3</sup>で対処できず、その歴史的な役割を終えようとしている。第一に、量的な問題としては高卒労働市場が最盛期(1992年)の49.9万人から、2002年の17.5万人へと三分の一に収縮し、新規学卒就職全体のなかで高卒労働力は、その絶対的な位置を下げている。現在では専門学校卒労働力よりも低い。第二に、地域的には県外就職が減って地元就職が中心になり、「広域」の意味が減じている<sup>4</sup>。第三に、求職と求人とのマッチングに長時間かかるようになり、高校における教育課程の実行上、問題が生じるようになってきている<sup>5</sup>。第四に、正規雇用を提供するという建前が壊れ、派遣労働や契約社員でも就職できればよいというところに獲得目標が下がっている学校も現れている。その結果、最近になって『学校基本調査報告書』(文部科学省)でも非正規雇用(「一時的な仕事に就いた者」)の数を計上するようになった。

このような環境のなかで高校生は、しかも圧倒的な買い手市場において、就職を決定しなければならなくなっている。この事実は無視できない。

次に後者について。なんとといっても高校生にとって職業選択が困難になったことである。従来においては、希望職種と現実の就職先をマッチングさせることには飛躍もあったが、なによりも正規雇用であること、すなわち職の安定性が保証されていたため、生徒にとっても受け入れることができた。しかし、職の安定性はゆらいでいる。その上第一に、文化全体が表現的個人主義<sup>6</sup>へシフトして行くなかで、職業も生活を支えるという意味での「生業」から、自己表現の重要な場所へと変わりつつある<sup>7</sup>。しかしながら第二に、価値志向の多元化に伴い、どう自己

---

練は全然役に立たないので学校では潜在能力や人柄を養成すればよい」のか、という両極端に流れてしまいがちな若年者向けの職業訓練の現状を念頭に置くなら、新しい「足場」としての職業訓練をどうつくるかという問題につながってくる(本田由紀『「ニート」っていうな!』光文社新書2006)。

<sup>2</sup> 学校から企業への「移行」を議論する際、職業紹介の側面に注目が集まり、高校生の就職を可能にしてきた仕組みという評価が一般的であった。しかし、それは正確な評価ではない。労働力を需要する企業にとって必要な仕組みであったからこそ、成り立っていたことを忘れるわけにはいかない。企業にとっては高卒労働力の調達である。この両面を意識すると労働力調達・職業紹介と呼ぶ方が正しい。

<sup>3</sup> 文科省『「高卒者の職業生活の移行に関する研究」最終報告』(2002年3月)

<sup>4</sup> 厚生労働省(旧労働省)の「新規学卒の労働市場」によれば、1990年の県外就職率は、26.4%であり、2004年は20.3%である。男子にしばるとその傾向は顕著で、30.3%から22.5%に減じている。

<sup>5</sup> 学校職業紹介は、9月16日から企業による試験と内定の公表が始められているが、10年ほど前までは、この段階で多くの者が内定を得ていた。10月末の内定率の年次別の変化をみると、1990年度に最高値(84.3%)を記録する。しかし徐々に、その率はさがり、2002年度に最低(47.1%)となった。内定が出るのが遅れている。そのため就職活動は長期化することになった。北海道においては、新規学卒就職は解禁される9月で内定ができることは少なくなっている。新規採用としてではなく、欠員補充の意味を持つようになり、そのため就職内定時期が冬季手当支給以降の、1月にずれ込む例も多く聞く。

<sup>6</sup> R.N.ベラー他『心の習慣』みすず書房1991(原著Robert N. Bellah, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press, 1985)

<sup>7</sup> 杉村芳美は、「職業意識の教育は可能か」(『発言者』110, 2003年6月所収)において職業理想教育(「やりたい仕事、就きたい職業を考えさせる教育」)は、「職業人としてもつべき意識としての職業意識の形成をかならずしも導くとはいえないだろう。」と指摘している。なぜなら「職業理想をもつことは、個人の欲求ないし目標

表現するのか、それを見つけ出すことは困難になった。すなわち一方で自己表現が強いられながら、他方で何を自己表現するのがわからないという、ダブル・バインドに陥っている<sup>8</sup>。さらに第三に、職業に関する情報は昔に比べれば増えてきたものの、抽象化・平板化され受け取られている。現実の職業の「就いてみて始めてわかる」というようなところに目が届くことはなく、いくつかのデータでわかった気になってしまう。また仕事をみる時間的なスパンは短く、評価も単純化されてしまう。そのため、求職と求人とのマッチング・ポイントが限定される<sup>9</sup>。すなわち、自己表現のひとつとして働くことをとらえる考え方が広がるなかで、同時に現実の職と折り合いをつけることが難しい在り方で、選択が行なわれなければならないのである。

このように高卒就職は大きな転換点にあるわけだが、担い手である高校生に対する評価はどうなっているのだろうか。残念ながら、高校生の職業意識は否定的評価を受けている。特に、高卒就職者の職業意識について、経済界が低く評価しているという調査結果は広く知られている<sup>10</sup>。さらにフリーターの職業意識の特徴が進路多様校の高校生のそれと共通していることを明らかにした研究はよく知られている<sup>11</sup>。

だからこそ本稿では、高校生の職業意識を分析の対象とする。なぜなら、高校生の職業意識は問題をもっていることが前提になって、インターンシップを初めとする勤労意欲喚起の諸政策が取り組まれているが、そもそも高校生はどのような職業意識をもっているのかは、かならずしも明らかになっていないと考えるからである。特に、現代日本において生徒が進路を決定して行く本質的な困難について議論は及んでいない。本稿では職業意識を統計的な操作（主成分分析とクラスター分析）によって導き出し、進路決定のために要求される適性把握や目標発見の問題、希望する労働条件と職業、フリーターへの評価、職業意識の決定要因、学校への期待などとの関連の検討を通じて、上述の課題に接近する。

---

次元の意識であるのに対し、職業人としてもつべき職業意識は他者との相互依存的な共同関係の次元での意識であるからだ。「職業意識は、社会という相互依存的の体制に参加し一定の役割を引き受け、共同生活への責任を果たすという意識」である。すなわち、現状の職業選択では、この共同関係の次元が追い出されてしまう。また片瀬一男は、『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』（東北大学出版会 2005）において生徒の職業意識が専門職志向に「煽られ」、アノミーを起こしていると診断している。

<sup>8</sup> 土井隆義は、「『個性』を煽られる子どもたち」（岩波ブックレット No.633, 2004）で個性の発揮が強いられる状況を「『個性』を煽られる」と表現している。

<sup>9</sup> 生徒が自己中心的に自分のやりたいことを希望するように、企業も自分の必要とする仕事だけをさせたいと考えている。両者の仲立ちをする領域が存在していないために、生徒は自分のやりたいことを曲げずフリーターになるか、企業の要請に全く従ってしまうかの、オール・オア・ナッシングに構造的に追い込まれてしまう。筆者は仲立ちをする領域は是非とも必要であり、それが職業（職種）であると考えている。注1も参照のこと。

<sup>10</sup> 東京経営者協会教育研修部の「『高校新卒者の採用に関するアンケート調査』について」（日本経営者団体連盟・東京経営者協会教育研修部, 2001）等に典型的である。しかし同調査を、時系列的にみると、実は評価の差が大きいことがわかる。手元にあるもので確認しておく、2001年の応募者（高校生）の「職業観・勤労意欲」への不満は45.7%であったが、2003年のそれは13.5%へと激減し、2004年は26.7%と多少揺れもどしている。このような短期間で、高校生の「職業観・勤労意欲」が大きく変わることは考えにくく、その年の採用の状況等に関わって評価が変わっているのではないかと推測される。すなわち一概に、「職業観・勤労観」に問題があるとはいえない。しかしながら、国立教育政策研究所の「『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究』報告書（概要）」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2002）においても、「職業観・勤労観」の育成が求められる理由に、学校・企業関係者から、「未成熟や低下といった厳しい評価が大勢を占める」と断じられている。

<sup>11</sup> 下村英雄は「高校生の進路意識と希望進路の変更」（日本労働研究機構『進路決定をめぐる高校生の意識と行動——高卒『フリーター』増加の実態と背景——』2000, 所収）において、フリーターと共通する職業意識（ただし論文では、「進路意識」としてとりあげられている）を首都圏の進路多様校の分析から導き出している。本稿ではこの分析を比較の対象としている。また以下ではこれを JIL 研究と呼ぶ。

当然のことながら、ここからえた示唆が現代日本の高校生全員にあてはまると言いたいわけではない。JILの職業意識研究との比較も行ないながら分析は進められるが、首都圏都市部の高校生と北海道S市の高校生には職業意識の点で共通性も確認できるが、フリーターへの評価の点で明らかな違いをもっていた。そのため本稿は、地方の高校生の事例を明らかにすることにとどまる。

結果として導き出されたのは、一概に「劣っている」とか「優れている」とか言いえない多面的な意識である。そこから生徒の職業意識を受け止めうる社会の側（学校も含めて）の課題のヒントを得たい。

叙述の順序は以下のようにになっている。

第1に、S市の3校の進路状況と労働市場の状況を明らかにする。

第2に、高校生の職業意識の分析を主成分分析によって、職業意識類型の設定をクラスター分析によって行なう。まず高校生の職業意識の全体的な特徴を、主成分分析によってとらえる。次に職業意識を個人ごとの一貫性のあるまとまりとしてとらえ直すために、類似するパターンをもった生徒を幾つかのグループ（類型）にまとめるクラスター分析を行なう。そして分析から判明したクラスターのそれぞれの存在割合や特徴を明らかにする。

第3に、進路選択で生じる基本的な問題、自己理解の問題についての検討を行なう。進路選択を行なうためには、自分の求めるもの（目標の発見）と自分の適性把握が必要になる。この目標発見や適性把握が進路によってどう異なるのか、また職業意識との関係はどうなっているのか、について検討する。

第4に、進路意識を論ずる際に引き合いにだされることが多い、フリーター意識との関係を検討する。首都圏都市部の調査であるJIL研究とかなり違っていることが明らかにされる。

第5に、職業意識を違う角度から考える。カテゴリカル回帰分析によって職業意識の差異が何によって決まってくるのかに迫ってみたい。学校種や性別、進路希望の違い、さらにインターシブ体験やアルバイト経験等の要因が職業意識にどのように影響を与えているかを検討してゆく。

そして最後に、学校への要望を検討する。

## 2. 北海道S市の高校3年生の進路と就職

S市は北海道北部地域にあり、市内には高等学校が3校ある。高校の内訳は、道立全日制普通科の1校（A高校とする。以下同様）、同じく道立全日制専門学科（商業）の1校（B高校）、市立昼間定時制普通科の1校（C高校）である。他地区の高校への通学やその逆もあるが、S市の高校生をほぼ網羅している。

調査対象としたのは、進路決定時期（9月）の高校3年生である。

まず学校の差異に注目しながら、3校の生徒の進路希望を昨年度のそれと対比させてみてゆく。それから就職に絞って地域労働市場の状況を明らかにする。

### (1) 調査の概要とS市（3校）の進路状況

本研究のもとになった調査は、2004年8・9月に行なわれた進路指導担当教員からの詳細なインタビューと生徒に対するアンケート調査、そして職業安定所の担当係員からのインタ

ビュー調査である。また学校と職業安定所から必要な資料の提供をうけた。

アンケート調査は、ホームルーム等の時間を使い生徒に書いてもらい、学校で回収する形をとった。2004年度の3年生は全体で207名だったが、調査票に白票や無効票があったため202名(97.6%)が有効票となっている。内訳はA高校が125名、B高校が59名、C高校が18名である。

まず、前年度(2003年度)の進路状況の検討から進路の基本的動向を確認しておく。

2003年度のS市の高校3年生は252名となっている(図表1)。その進路は多い順に、専門・各種学校進学者が93名(252名に占める割合は36.9%,以下略)、就職者が71名(28.2%),四年制大学進学者が48名(19.0%),短期大学進学者は少なく20名(7.9%),その他15名(6.0%)となっている。短期大学進学者は女子に、四年制大学進学者は男子に多い。

S市における進路の特徴を明らかにするために、同年度の北海道全体の進路状況と比較しておく。北海道全体の進路状況を割合でみると、多い順に、四年制大学進学34.7%,専門・各種学校進学が23.6%,就職が20.5%である。S市の方が就職と専門・各種学校進学で多く、四年制大学進学が少ない。

それでは3校の進路状況にはどのような違いがあるのだろうか。3校の進路を、多い順で第2位まであげてみる。

A高校は、専門・各種学校進学が42.5%で、四年制大学進学が29.5%となっている。進学が主となっていることがわかる。それに対して、B高校とC高校は就職中心である。B高校は、就職が53.1%,専門・各種学校進学が30.2%,C高校は、就職が60.0%,専門・各種学校進学20.0%となっている。

これから分析をしてゆく上で、A高校は他の2校に比べて大きすぎるため、二つに分けたい。これはA校の進路状況が大きく異なる二つのコース(A・B)に対応している。Aコースは専門・各種学校への進学が、Bコースは四年制大学への進学が中心となっている。これ以降A高校は、コース別にわけて取り扱うことにする。

図表1 平成15年度卒業生の進路状況(3校合計)

項 目			男 子	女 子	合 計
就職	民間	(名) (%)	26 44.1%	33 55.9%	59 100.0%
	公務員	(名) (%)	10 83.3%	2 16.7%	12 100.0%
進学	四年制大学	(名) (%)	32 66.7%	16 33.3%	48 100.0%
	短期大学	(名) (%)	3 15.0%	17 85.0%	20 100.0%
	専門・各種学校	(名) (%)	47 50.5%	46 49.5%	93 100.0%
	その他	(名) (%)	8 53.3%	7 46.7%	15 100.0%
	未 定	(名) (%)	4 80.0%	1 20.0%	5 100.0%
	計	(名) (%)	130 51.6%	122 48.4%	252 100.0%

※ 学校提供資料により作成。

図表 2 学校コース別・進路希望別生徒数

		就職	専門・各種学校	短期大学	四年制大学	フリーター	その他	未定	計
A高校	(名)	11	35	7	9	1	0	0	63
Aコース	(%)	17.5%	55.6%	11.1%	14.3%	1.6%	0.0%	0.0%	100.0%
A高校	(名)	3	22	6	31	0	0	0	62
Bコース	(%)	4.8%	35.5%	9.7%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
B高校	(名)	37	16	2	3	0	0	1	59
	(%)	62.7%	27.1%	3.4%	5.1%	0.0%	0.0%	1.7%	100.0%
C高校	(名)	13	3	0	0	1	1	0	18
	(%)	72.2%	16.7%	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	0.0%	100.0%
計	(名)	64	76	15	43	2	1	1	202
	(%)	31.7%	37.6%	7.4%	21.3%	1.0%	0.5%	0.5%	100.0%

※ アンケート調査より作成（以下、断りのない限り同様）

続いて2004年度9月の進路希望をみてゆく（図表2）。

調査時点（9月）の進路希望は、全体で多い順に、専門・各種学校が76名（202名に占める割合は37.6%、以下省略）、就職が64名（31.7%）、四年制大学が43名（21.3%）、短期大学が15名（7.4%）である。昨年と比べて生徒数が少ない分、希望者数は減っているが、その内訳はあまり変わっていない。就職（+3.5%）と四年制大学で多く（+2.3%）、その他が少ない（△5.5%）だけである。また進路未決定は1名と少ない。就職希望者と四年制大学進学希望者は、「希望」の分だけ数字は若干高いが、それほど「夢を見ていない数字」であろう。

学校別では、A高校Aコースが専門・各種学校進学希望中心（55.6%）で、Bコースが四年制大学進学希望中心（50.0%）、B高校とC高校が就職希望中心（それぞれ、62.7%と72.2%）となっている。

男女で異なるのは短期大学進学希望と四年制大学進学希望で、前者に女子が多く後者に男子が多い。

## (2) 新規高等学校卒業者の地域労働市場はどうなっているか

N職業安定所（以下、N職安）から提供していただいたデータ（「新規学校卒業者の職業紹介状況」）と3校の就職実績データをもとに、N職安管轄の新規学卒労働市場の状況を明らかにする。なおS市はN職安の管内になる。

まず「新規学校卒業者の職業紹介」を検討する。続いてこれを補完する形で3校の実績を検討する。

就業地別・職業別の新規学卒者の求人数を図表3に掲げた。

N職安管内の2004年3月末までの延べ求人数は237名であった。求人地域別でみると、N職安管内（以下、管内と省略）が35.9%、管内以外の道内（以下、「道内」と省略する）が44.7%そして道外が19.4%を占めている。道内の比率が最も高く、管内がそれに続くことがわかる。道外求人は減少を続けているが、それでも2割を占めている。

職種のデータをみると、地域差が職種差とつながっているという事実がはっきりする。全体的にはサービス職が多く（33.8%）、それに技能工等が続く（25.3%）。販売職（17.3%）と事務職（16.5%）は少ないことがわかる。

次に地域別にみる。管内求人は、販売職（29.4%）と事務職（24.7%）の多さに特徴がある。

図表3 就業地別・職業別の新規学卒求人数

		専門・技術・ 管理職	事務職	販売職	サービス職	技能工等	その他	計
N職安管内	(名)	10	21	25	13	16	0	85
	(%)	11.8%	24.7%	29.4%	15.3%	18.8%	0.0%	100.0%
北海道内	(名)	5	18	11	53	19	0	106
	(%)	4.7%	17.0%	10.4%	50.0%	17.9%	0.0%	100.0%
北海道外	(名)	2	0	5	14	25	0	46
	(%)	4.3%	0.0%	10.9%	30.4%	54.3%	0.0%	100.0%
計	(名)	17	39	41	80	60	0	237
	(%)	7.2%	16.5%	17.3%	33.8%	25.3%	0.0%	100.0%

※ N職安提供資料により作成

図表4 2004年3月末のN職安管内からの地域別・男女別就職者（就業地）

		N職安管内	N職安管内の うちS市のみ	道内	道外	計
男子	(名)	19	10	51	5	75
	(%)	25.3%	13.3%	68.0%	6.7%	100.0%
女子	(名)	44	15	36	0	80
	(%)	55.0%	18.8%	45.0%	0.0%	100.0%
計	(名)	63	25	87	5	155
	(%)	40.6%	16.1%	56.1%	3.2%	100.0%

※ N職安提供資料により作成

他方、道内求人はサービス職（50.0%）に、道外求人は技能工等（54.3%）に偏っている。

続いて、実際の就職者数を、就業地別に検討する（図表4）。就職者数は155名で、これは求人数の65.4%にあたっている。N職安管内の就職は63名である。これは就職者全体の40.6%を占める。道内就職は87名（56.1%）で、この二つで150名（96.7%）となる。道外就職は5名（3.2%）しかない。道内就職の比重が最も高く、N職安の管内就職がそれに続く。道外就職が予想外に少ないのは、N職安の管内に工業系の専門高校が1校しかなく、それが2間口と小さな高校であることが関係していると思われる。

さらに細かい就業地をみてみよう。S市の就職は25名（全体の16.1%）でN職安管内の就職者63名の39.7%を占めている。N職安管内の最大都市であるN市の就職と並ぶ数字である。さらに道内をもっと具体的な地名でみると、最も多い就職地は旭川市であり（45名）、札幌市（24名）を上回っている。これに次ぐのは室蘭市の8名となる。すなわち新規就職する者が最も多く就職する地域は旭川市となる。

この就業地別就職者のデータには残念なことに職種のデータがない。そのため対応関係は厳密ではないが、学校調査で判明した同期の就職者の職種を代わりに検討してみたい。職種の区分が、「専門・技術・管理職」、「事務職」、「販売職」、「サービス職」、「技能職」、「その他職」とラフになっているけれど比較の役には立つだろう。

2003年度のS市3校の卒業者のうち就職者の地域別・職業別の人数は、図表5にある。

これからわかるのはN職安就職が管轄した就職者の36.1%にあたる56名である。このうちS市の就職は35名で、これに限るとN職安のS市就職のデータ（25名）よりも多い。他地域からの流入も考えられることを考慮に入れると、N職安が管轄した学校紹介就職よりも、さらに

図表 5 2004年3月末のS市3校の地域別・職業別就職者数

		専門・技術・管理	事務	販売	サービス	技能職	その他	計
S市内	(名) (%)	5 14.3%	12 34.3%	8 22.9%	2 5.7%	3 8.6%	5 14.3%	35 100.0%
S市を加えた N職安管内	(名) (%)	7 14.6%	14 29.2%	8 16.7%	5 10.4%	6 12.5%	8 16.7%	48 100.0%
北海道内	(名) (%)	0 0.0%	0 0.0%	1 16.7%	0 0.0%	1 16.7%	4 66.7%	6 100.0%
北海道外	(名) (%)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	2 100.0%
計	(名) (%)	7 12.5%	14 25.0%	9 16.1%	5 8.9%	9 16.1%	12 21.4%	56 100.0%

※ 学校提供資料により作成

多くの生徒が、縁故等を通じてS市で就職をしたことになる。他方で、道内就職や道外就職はかなり少なく、総じてS市内の就職に集中した形になっているといえる。これには3校うちの1校が商業系の専門高校であることが関わっている。これが工業系の専門高校であればかなり異なる結果となっただろう。

職種の分析にもどりたい。全体としては、最も多いのは事務職(25.0%)で、その他職(21.4%)、販売職と技能職が16.1%で並んでいる。専門・技術・管理職は12.5%、サービス職が8.9%と少ない。地域別に比較してみよう。S市内も加えた管内就職は多い順に、事務職(29.2%)、販売職とその他職が並んで16.7%となり、N職安データの管内求人職種の分布に近づく。道内就職と道外就職は数が少ないが、参考に上げておくと、道内就職はその他職が多く(66.7%)、道外就職は技能職(100%)が多い。N職安が管轄した道内就職ではサービス職が中心であったことを思い出ししてほしい。数は少ないがこの点は大きく異なっている。

さらに詳細に、S市内だけの職業別就職者(全体で35名)をみると、多い順に事務職12名(34.3%)、販売職8名(22.9%)、専門・技術・管理職5名(14.3%)、その他職5名(14.3%)、技能職3名(8.6%)、サービス職2名(5.7%)となっている。高校就職で人気のある事務職や販売職への就職者が多いという結果である。

ここまでの検討をまとめよう。N職安が管轄した学校紹介就職において、求人の地域的な分布と就職の地域的な分布はほぼ相似の関係になっていた。道内就職を中心とし、それに管内就職が続いていた。しかし道外就職は非常に少なく、この点は求人と異なる。そして求人における地域差は、職種の差でもあった。さらにS市3校のデータから管内就職者の職種構成を検討したが、管内求人の特徴とそれほど変わらなかったことがわかった。しかし道内就職、職種でいえばサービス職は異なっていた。そしてS市3校の就職者はN職安が管轄した学校紹介就職を上回る形でS市に収斂しており(「地元志向」)、そのことは同時に職種の選好の結果でもある<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> しかし生徒全体の将来の居住志向をみると、とうてい「地元志向」であるとはいえない。

3年生全体を対象として、将来住む場所を聞いた結果にふれておきたい。

全体的には、「住む場所にはこだわらない」が最多の73名(36.1%)である。「仕事の都合で他の土地に住むこともあるが最終的にS市に近い都市(旭川や名寄など)に住みたい」が48名(23.8%)でそれに次ぐ。「S市かその近くに住みつけたい」(「住みつけたい」と省略)は47名(23.3%)で、これに「最終的にS市か

### 3. 生徒の職業意識はどうなっているか

本稿では「職業意識」を、個別の職業志向を規定する存在として考えてみる。個別の職業生活の志向を聞いた設問の回答パターンを分析し、そこからS市の高校生に特徴的な職業意識を浮かび上がらせたい。使用する手法はJIL研究と比較する目的で主成分分析をとった。

#### (1) 職業志向の地域差 — JIL 研究との比較

生徒の職業意識はどのようなものだろうか。先に述べたように職業意識を、将来の職業生活をどのようにしたいと希望しているのか（職業志向）の点から考えたい。

職業意識を明らかにするために10の質問を行なった<sup>13</sup>。職業意識は、職業と環境(主に生活)との関係、職業を考える時間的なパースペクティブ、職業の性格、職業生活の質、職業のためにどのように自分を変えるか等複雑で多岐にわたり、ここでの10の質問も十分とはいえないが、まずはこの個別の質問への回答を手がかりにして考えてみたい。

質問は次のようになっている。また質問を職業志向として筆者が解釈したものを後ろに括弧で掲げである。

「A 仕事以外に自分の生きがいをもちたい」(仕事以外の生きがい志向)、「B 若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい」(若年転職志向)、「C 専門的な知識や技術をみがきたい」(専門化志向)、「D ひとよりも高い収入を得たい」(経済的成功志向)、「E 有名になりたい」(社会的名声志向)、「F 人の役に立つ仕事をしたい」(社会的貢献志向)、「G あんまりがんばって働かず、のんびりくらしたい」(マイペース志向)、「H 安定した職業生活を送りたい」(安定志向)、「I 自分に合わない仕事ならしたくない」(適性重視志向)、「J 将来の生活については考えていない」(現在中心志向)である。

このそれぞれ対しての考えを、「1 とてもそう思う」、「2 ややそう思う」、「3 あまりそう思わない」、「4 全くそう思わない」の四つから選択してもらった。強調された形で職業意識を抽出するために5点法ではなく、4点法を採用した。

この選択された1から4を仮に得点と考える。この得点の平均を分析することで全体的な特

---

その近く」の31名(15.3%)を併せても78名(38.6%)と三分の一を少し上回る程度にすぎない。「東京や札幌などの大都市」が35名(17.3%)、「S市には住みたくない」が14名(6.9%)となった。

S市に「住みつけたい」のは2割程度でしかない。生きるためにはS市を離れなければならないことは生徒にとって自明である。

またこの「将来住む土地」は、進路希望と深く結びついている。進路希望を梃子に将来の生活を考えているわけだ。

就職希望者は「住みつけたい」が最多(42.2%)である。以下、「最終的に近い都市」(28.1%)、「住む場所にはこだわらない」(26.6%)が続く。専門・各種学校進学希望者は、「最終的に近い都市」(24%)、「住みつけたい」(18%)と続くが、「住みつけたい」は人数的には就職に次ぐ14名である。短期大学進学希望者は、「住みつけたい」(20%)、「最終的にS市」(27%)、「最終的に近い都市」(27%)も多い。就職に継ぐ地元志向の強い進路といえる。逆に四年制大学進学希望者は、「住む場所にはこだわらない」(44%)で「大都市」(26%)が続く。「すみつけたい」と「最終的にS市」は、合わせて6名(14%)で少ない。

フリーターは、数が少ないが「大都市」を志向していた。

<sup>13</sup> この質問は、下村(2000, 前出)で使用された調査票の設問を参考にした。北海道の地方都市の高校生の職業意識が首都圏の高校生とどのような差異をもっているのかは非常に重要な論点であり、この問題を考慮せざるをえないと考えたからである。ただし、この調査の対象は、「高卒フリーター」の生まれるメカニズムに注目したものであるため、いわゆる普通科の進路多様校に、一部専門高校を加えている。また調査項目の活用の仕方も異なっている。

徴をつかむことができる。これからみると、得点の低いもの、すなわち「肯定」に強く偏っている（1.0から1.5点未満の間）のが、「A 仕事以外の生きがい志向」（1.36点、以下「点」を省略）と「H 安定志向」（1.39）である。さらに弱く肯定に傾いている（1.5から2.5未満の間）のが、得点の低い順に、「C 専門化志向」（1.53）、「F 社会的貢献志向」（1.64）、「I 適性重視志向」（1.84）、「D 経済的成功志向」（1.86）、「B 若年転職志向」（2.28）、「G マイペース志向」（2.38）と続く。そして弱く否定に傾いている（2.5から3.5未満の間）のが、得点の低い順に、「E 社会的名声志向」（2.76）、「J 現在中心志向」（3.06）である。

全体としては、「A 仕事以外の生きがい志向」と、「H 安定志向」とが強調された結果になっている。一見すると、職業意識としては消極的なものという印象をうける。しかし「仕事以外に自分の生きがいをも」つことや「安定した職業生活を送」ることは、生徒のなかに広く職業生活へのゆらぎや不安が浸透していることを念頭に置くなら当たり前の感覚といってもよいと考えられるし、「C 専門化志向」の得点がこの2者に接近していることを考慮にすれば、「消極的だ」という断定はできない。また、後に話題となる関係で、「B 若年転職志向」は、若干肯定に傾く志向にすぎないことも指摘しておこう。

同じ項目を用いた JIL 研究の調査結果との比較をみる<sup>14</sup>と、差が±0.2点の範囲におさまる（図表6）。唯一の例外は、「社会的名声志向」で0.30点低くなっている。この項目に対して肯定的か否定的かで差がでるが、全体的な傾向はほぼ同一といってよい。本調査と JIL の調査が、北海道の地方都市の悉皆調査か本州首都圏近郊の普通科進路多様校と専門高校を対象としたものか、という違いがあるにもかかわらず、職業意識としてはほぼ同一の結果となった。

次に、このそれぞれの項目の背後にある特性（職業意識）にまとめることができるかを、主成分分析によって検討してみたい。用いたのは主成分分析法で、回転は Kaiser の正規化をとまなうバリマックス法によって行なった。

## (2) 主成分分析からみた職業意識

前項の10項目へ主成分分析を行なった結果、固有値1.0以上の三つの成分を抽出することができた（図表7）。この項目（志向）から抽出された成分を、ここでは職業意識として考えてみる。

第1成分は、量の多いものから順に、「F 社会的貢献志向」、「C 専門化志向」、「A 仕事以外の生きがい志向」とこれに、マイナスの符号がついた「G マイペース志向」、「J 現在

図表6 選択項目の平均得点の比較

	a 仕事以外に自分の生きがいをもちたい	b 若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい	c 専門的な知識や技術をみがきたい	d ひとよりも高い収入を得たい	e 有名になりたい	f 人の役に立つ仕事をした	g あんまりがんばって働かず、のんびりくらしたい	h 安定した職業生活を送りたい	i 自分に合わない仕事ならしたくない	j 将来の生活については考えていない
JIL 研究(点)	1.43	2.10	1.52	1.84	2.46	1.84	2.48	1.48	1.69	2.94
本調査(点)	1.36	2.28	1.53	1.86	2.76	1.64	2.38	1.39	1.84	3.06
カイ二乗検定の結果		*			**	*			*	

注) \*\*は1%有意水準、\*は5%有意水準を表す。

<sup>14</sup> 注13参照。

図表 7 職業意識の主成分分析

	成 分		
	貢献琢磨意識	転職獲得意識	経済的安定意識
A 仕事以外の生きがい志向	<b>0.423</b>	0.167	0.355
B 若年転職志向	-0.020	<b>0.690</b>	-0.054
C 専門化志向	<b>0.540</b>	0.376	0.050
D 経済的成功志向	-0.055	0.388	<b>0.641</b>
E 社会的名声志向	0.074	<b>0.654</b>	0.290
F 社会的貢献志向	<b>0.700</b>	0.192	0.233
G マイペース志向	<b>-0.538</b>	0.261	0.410
H 安定志向	0.082	-0.171	<b>0.868</b>
I 適性重視志向	0.069	<b>0.590</b>	0.040
J 現在中心志向	<b>-0.706</b>	0.170	0.139
因子寄与	1.768	1.734	1.622
寄与率	17.68%	17.34%	16.22%

因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

中心志向」からなる。第1成分では、「G マイペース志向」、「J 現在中心志向」は否定されている。さらに、「A 仕事以外の生きがい志向」は、一見すると他の項目と矛盾するような印象を与える。数字的には小さく、意味もまた微妙だが、「仕事を仕事以外の生活を犠牲にすることはないような形で考える」という青年にとって当たり前を理解を示しているともとれる。これが第1成分の内容であることに注目したい。全体としては、「仕事による社会への貢献、そのために専門的な知識や技術をみがく」、さらに「マイペースな生き方や、今のことしか考えない生き方は否定」される。ということでこの成分に「貢献琢磨意識」というニックネームをつけた。

第2成分は順に、「B 若年転職志向」、「E 社会的名声志向」、「I 適性重視志向」の成分量が大きくなっている。これらをそのままつなげてみると、「自分にむいた仕事をみつけるために、若いうちは転職をしつつ、社会的名声を獲得する」というところだろう。「転職獲得意識」というニックネームをつけてみたい。「適性重視志向」を直接ニックネームに反映させることができなかったが、「自分に合った」仕事を手に入れることも含まれていると考えておく。

第3成分は、「H 安定志向」、「D 経済的成功志向」の二つからなる。ニックネームは、そのまま「経済的安定意識」を用いたい。

ここでわかったことは、S市の高校生の最も主要な職業意識が、「貢献琢磨意識」であることだ。ある意味、古風である。変わったと思われる点は、この意識に「A 仕事以外の生きがい志向」が位置付いていることだろう。仕事も生活も、という「両立主義」がスタンダードになっている。次いで、「転職獲得意識」である。若いうちに転職する原動力は、自分にあった仕事を見つめるためであるし、有名になるためでもある。そして最後の「経済的安定意識」は、現在の厳しい雇用情勢を意識したものであろう<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> 下村英雄が、(2000, 前出)でおこなった進路指向の主成分分析の結果と比較しておく。ここでは、第1成分がBAIの肯定、第2成分がFCの肯定とGJの否定、第3成分ではDEの肯定、第4成分ではHが肯定されている。本研究では第1成分がFCAの肯定とGJの否定、第2成分がBEIの肯定、第3成分がHDの肯定からなる。下村の第1成分と本稿の第2成分が類似し(BI)、下村にはAが本稿にはEが加わっている点が異なる。下村

この主成分分析の結果を、S市の高校3年生が「貢献琢磨」する職業生活を志向しており、昔とあまり変わっていないと、単純に結論づけることはできないだろう。どのような生徒に、どのような形で、この三つの職業意識が担われているかを知らなければならない。

#### 4. 生徒はどんな職業意識をもった集団に分かれるか

主成分分析では、生徒全体の職業意識の特徴を三つの成分として抽出した。しかし生徒の差異に注目すると、幾つかの異なる職業意識をもった下位集団に分かれていることが当然想定される。ここではクラスター分析を使用するが、そうすることで、生徒を類似する職業意識をもった幾つかの下位グループに分類し、それぞれの差異を検討することが可能となる。ここでは4グループに分割することにした。

##### (1) 職業意識類型の抽出

前章と同じ職業志向をたずねた設問にクラスター分析を行ない、回答の類似する四つのグループをワード法で抽出した。4というグループ数は、それぞれのクラスターのケース数が小さくなりすぎず手頃な大きさであると同時に、分化の程度も充分であると考えたからだ。クラスター分析の結果と職業意識類型のニックネームは、図表8である。

クラスターの特徴を見つけるために、まず各項目の平均点数をみたい。すると前項で発見した成分が強く影響していることがわかる。

さらに平均からのズレを手がかりにクラスターの特徴を順に記述していこう。点数の少ない(低い)ものが肯定であることを注意してほしい。

クラスター1は、「A 仕事以外の生きがい志向」、「C 専門化志向」、「H 安定志向」と少し離れるが「F 社会的貢献志向」の点数が低く、「E 社会的名声志向」と「G マイペース志向」が高い。A、C、Fの肯定とG否定は第1成分(「貢献琢磨意識」)であった。しかしこれに第3成分(「経済的安定意識」)が加わっている。そこでクラスター1には折衷的な「安定琢磨」型というニックネームをつける。生徒数は、57名である。

クラスター2は、「A 仕事以外の生きがい志向」、「C 専門化志向」そして「F 社会的貢

---

は、ABをひとまとまりにして、「いろいろな経験」が進路意識のキーワードであると主張している。Bは「若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい」である。「いろいろ経験したい」ことは、仕事以外も考えられるが、やはり第一は仕事と受け取れるだろう。そのため、多少強引な解釈となっている。下村にそって理解しても、「自分にむいた仕事と生活を見いだしたい」というところだろう。これをフリーターにつながる考え方だと下村は断ずるけれど、筆者はそれほどおかしな考え方ではないと思う。またBの単純な肯定・否定を検討すると、N.A.を除いて肯定が4391名(67.5%)、否定が2111名(32.5%)、平均点でも2.1点でそう高くない。ところで「自分に向いた生活と仕事を見いだしたい」は、後の章ででてくる高校生の進路選択に関わる根本的な悩みである、自己把握(自分さがし)と目標発見(やりたいことさがし)と確かにつながっている。本稿の主成分分析では、AとBが同じ成分を構成せず、Aは第1成分に所属し「貢献琢磨意識」、Bは第2成分(ED)と結びつくため、「転職獲得意識」という整理となっている。ここでE(「社会的名声志向」)は、とりあえず文字通りに、社会的名声志向と理解している。先の話しにもどると、下村の第1成分におけるBIとAの結びつきは、先ほど述べたように「自分にむいた仕事と生活を見いだしたい」と解釈することができた。ここではIを「自分に向いた…を見いだす」と受けとっている。これに倣うと本稿の第2成分のBIとE(「社会的名声志向」)の結びつきは、「自分に向いた仕事と出番を見いだしたい」と解釈できるのではないかと思う。すなわち、Eの「有名になりたい」は、文字通りの有名願望と受け取るのではなく、「自分が自分として名乗れるような出番(場所)を手に入れたい」というような意味で受け取れるのではないか。質問項目に改善の余地がありそうだ。

図表 8 職業意識クラスター別の志向得点とニックネーム

	生徒数 (名)	貢献琢磨意識					転職専門化意識			経済的安定意識		ニックネーム
		F人の 役に立 つ仕事 をしたい	C専門 的な技 術をき たい	A仕事 以外の 生きが いをも ちたい	Gあま りがん ばって か、の んびり とくら したい	J将来 の生活 には考 えてい ない	B若い うちは 一つの 仕事に まとい うこと を避け たい	E有名 になり たい	I自分 に合わ ない事 はした くない	H安定 した職 業を送 りたい	Dひと りより 高い取 入を 得たい	
クラスター1	57	1.56	1.33	1.30	2.70	2.98	2.39	3.12	2.42	1.26	1.60	「安定琢磨」型
クラスター2	43	1.33	1.33	1.40	2.81	3.74	2.60	3.09	1.56	1.65	2.74	「貢献琢磨」型
クラスター3	39	2.49	2.41	1.72	1.97	2.64	2.69	3.28	2.15	1.56	2.21	「期待しない」型
クラスター4	58	1.40	1.29	1.14	2.00	2.91	1.67	1.81	1.28	1.19	1.24	「すべて望む」型
平均	197	1.64	1.53	1.36	2.38	3.06	2.28	2.76	1.84	1.39	1.86	

職志向」の点数が低く、「G マイペース志向」と「J 現在中心志向」が特に高い。クラスター1と同様に第1成分（「貢献琢磨意識」）が強く支持されている。さらに第2成分の「I 適性重視志向」や第3成分の「D 経済的成功志向」が高いことから、より求道的な要素が強いように感じられる。これらのことからクラスター2には第1成分の意識をそのままクラスター名とし、「貢献琢磨」型というニックネームをつけたい。生徒数は43名である。

クラスター3は、第2成分を構成する「B 若年転職志向」、「E 社会的名声志向」の点数が相対的に高く、第3成分の「H 安定志向」が低い。また第1成分の一部であった「G マイペース志向」と「J 現在中心志向」の得点あまり高くない。「A 仕事以外の生きがい志向」も点数的に低い相対的にはそうでもない。すなわち第1成分（「貢献琢磨意識」）の一部が中立で、第2成分（「転職獲得意識」）が否定され、第3成分（「経済的安定意識」）も弱い。このようなことから、このクラスターには「期待しない」型というニックネームをつけたい。最も消極的な職業意識といってもよい。事例数は最も少なく39名である。

クラスター4は事例数が58名と最も多い。「B 若年転職志向」、「E 社会的名声志向」、そして「I 適性重視志向」の第2成分（「転職獲得意識」）と「D 経済的成功志向」の第3成分（「経済的安定意識」）、さらに「A 仕事以外の生きがい志向」、「C 専門化志向」、そして「F 社会的貢献志向」の第1成分（「貢献琢磨意識」）の全ての成分が支持されている。これらのことから全般的に積極的な職業意識ということで、「すべて望む」型というニックネームをつける。クラスター3と対照的な性格である。

クラスター分析の結果から、次のことがわかった。

第一に、主成分分析で確認した第1成分が強く影響したクラスターがある。クラスター2（「貢献琢磨」型）がそれにあたる。第二に、複数の成分がともに支持されているクラスターがある。クラスター1がそれで、第1成分（「貢献琢磨意識」）と第3成分（「経済的安定意識」）が支持されている。そして残る二つのクラスターは、全般的な職業意識の高低によって分かれた。クラスター4は、全ての成分が支持された。そのなかでも第2成分（「転職獲得意識」）が強く支持されている。逆がクラスター3で、全ての成分への支持が弱い消極的な性格をもつ。注意しておくのは、第2成分だけが突出したクラスターは存在していないことである。すなわち「転職獲得意識」だけをもつ生徒集団は存在しなかった。

この職業意識のクラスター（職業意識類型）の意味を考える前に、次章では一転して、生徒の進路探索における迷いの実態の検討をする。

## 5. 進路探索における迷い——適性把握と目標発見の困難

進路決定において生徒は、矛盾をはらんだ二つの、微妙に重なる逆方向を向いた疑問に答えをだすことを求められる。ひとつは、自分が何を求めているのかを明らかにすることである。これを仮に「目標発見」と押さえておきたい。そしてもうひとつは、自分に相応しい仕事は何かを明らかにすることである。これも同様に「適性把握」と押さえておく。この両者がそろって進路選択を行なうことが可能となる。本調査では、「進路決定時に悩んだこと」としてそれを聞いている<sup>16</sup>。

### (1) 進路選択時に悩んだこと

まず全体の傾向をみる（図表9）。このなかで、多く支持されたのはA（「自分がどんな仕事にむいているかわからない」とE（「やりたいものが見つからない」）である。それ以外で比較的支持が多かったのは、C（「進学か就職かで迷う」）で31.2%が肯定している。これを肯定しているのは就職希望者と短大進学希望者に多い（それぞれ41.9%、40.0%）。以降はAとEに絞ってみてゆく。

まず、「A 自分がどんな仕事にむいているかわからない」では、「とても感じた」、「少し感じた」を合わせると、実に7割に迫る（67.8%）生徒が肯定している。すなわち、生徒は自分の適性をつかみかねていることがわかる。

次に、「E やりたいものが見つからない」をみる。Eでは、全体では肯定が46.7%、否定が51.5%と拮抗していた。「何をやりたいのか」は分かっている生徒の方が若干多い。

簡単にするために、N.A.を除き、「とても感じた」と「少し感じた」を、また「あまり感じな

図表9 進路選択時に悩んだこと

		とても感じた	少し感じた	あまり感じなかった	全然感じなかった	N.A.	計
A 自分がどんな仕事にむいているかわからない	(名) (%)	52 25.7%	85 42.1%	44 21.8%	17 8.4%	4 2.0%	202 100.0%
B 進路について相談する相手がいない	(名) (%)	15 7.4%	37 18.3%	79 39.1%	67 33.2%	4 2.0%	202 100.0%
C 進学か就職かで迷う	(名) (%)	27 13.4%	36 17.8%	41 20.3%	93 46.0%	5 2.5%	202 100.0%
D 進路について親や先生と意見が合わない	(名) (%)	18 8.9%	32 15.8%	82 40.6%	66 32.7%	4 2.0%	202 100.0%
E やりたいものが見つからない	(名) (%)	45 22.3%	49 24.3%	39 19.3%	65 32.2%	4 2.0%	202 100.0%

<sup>16</sup> 質問は、「A 自分がどんな仕事にむいているかわからない」、「B 進路について相談する相手がいない」、「C 進学か就職かで迷う」、「D 進路について親や先生と意見が合わない」、「E やりたいものが見つからない」であった。これについて「1 とても感じた」、「2 少し感じた」、「3 あまり感じなかった」、「4 全然感じなかった」から選択してもらった。

図表 10 「適性把握－目標発見」のクロス表

			やりたいものが		計
			みつからない	みつかった	
自分がどんな仕事 に向いているか	わからない	(名) (%)	87 63.5%	50 36.5%	137 100.0%
	わかった	(名) (%)	7 11.5%	54 88.5%	61 100.0%
計		(名)	94	104	198
		(%)	47.5%	52.5%	100.0%

かった」、「全然感じなかった」をまとめて、クロス表を作ってみる(図表 10)。このクロス表にカイ二乗検定を行なうと、1%有意水準で関連があることがわかった。

より詳細にみてみよう。

「自分がどんな仕事に向いているかわからない」(以下、「適性把握」ができないと考える)し、同時に「やりたいものがみつからない」(以下、「目標発見」ができないと考える)生徒は、87名もいた。これは4領域のなかで最も多く、全体(198名)の半分弱(43.9%)を占めている。「適性把握」も「目標発見」も不明なタイプが約半数を占めていることを覚えておいてほしい。

「自分がどんな仕事に向いているかわからない」が、「やりたいものがみつかった」生徒は、50名(全体の25.3%)と約四分の一を占めている。「適性把握」はできないが、「目標発見」はできたというわけである。

「自分がどんな仕事に向いているかわかった」が、「やりたいものがみつからない」生徒は、7名(全体の3.5%)にすぎない。内的な関係は不明であるが、「適性把握」ができている場合は、「目標発見」はすんなりいくという関係があることがうかがえる。

そして最後に、「自分がどんな仕事に向いているかわかった」し、同時に「やりたいものがみつかった」というグループである。これは、54名(全体の27.3%)と約四分の一を占めている。「適性把握」と「目標発見」の両者ができた生徒は、全体の四分の一を占めるのみである。

すなわち、S市の高校3年生は、9月のほとんどの生徒が進路決定が済んでいる時期に、実は自分の「適性把握」と「目標発見」のどちらかが、あるいはその両方がつかめていない。その意味で、進路の決定は「仮」の意味をもっている。大まかにこう結論することができるが、具体的な進路による違いはないのか、次にそれをみてみよう。

## (2) 誰が悩んでいたのか——進路と職業意識

ここでは前述の「自分がどんな仕事に向いているか」と「やりたいものがみつかった」のクロス表において生じる四つの次元に注目する。それぞれ「わからない－みつからない」(「適性把握×－目標発見×」)と省略する。以下同様)、「わからない－みつかった」(「適性把握×－目標発見○」)、「わかった－みつからない」(「適性把握○－目標発見×」)、「わかった－みつかった」(「適性把握○－目標発見○」)という4区分である。このそれぞれは進路選択とどのような関係にあるのだろうか。

### 1) 進路との関係

図表 11 がそれをみたものである。カイ二乗検定からは関連があるという評価はくたせなかつ

図表 11 進路希望と「適性把握」目標発見

			「適性把握」と「目標発見」				計
			×-×	×-○	○-×	○-○	
進路希望	就職	(名) (%)	33 53.2%	16 25.8%	3 4.8%	10 16.1%	62 100.0%
	専門・各種学校	(名) (%)	27 36.0%	19 25.3%	2 2.7%	27 36.0%	75 100.0%
	短期大学	(名) (%)	8 53.3%	3 20.0%	1 6.7%	3 20.0%	15 100.0%
	四年制大学	(名) (%)	17 39.5%	12 27.9%	1 2.3%	13 30.2%	43 100.0%
	フリーター	(名) (%)	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%
	その他	(名) (%)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
	未定	(名) (%)	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%
計	(名) (%)	87 43.9%	50 25.3%	7 3.5%	54 27.3%	198 100.0%	

※ ×-×とは、自分がどのように仕事に向いているか（「適性把握」）わからない（×）と、やりたいもの（「目標発見」）が見つからない（×）の意味。○はわかった、あるいはみつかったの意味である。

た。すなわち進路模索の悩みは、進路と関係していないか、あっても弱い。

とはいっても平均を挟んで、性格の異なる二つの進路グループをみつけることはできそうだ。

第一に、就職希望者と短期大学進学希望者である。就職希望者は、「適性把握×-目標発見×」が最多である(53.2%)。続いて「適性把握×-目標発見○」(25.8%)、「適性把握○-目標発見○」(16.1%)と続く。この傾向は短期大学進学希望者も類似している。高校卒業後の生活の自由度という観点からいけば、最も早期にそれが失われる就職を希望する生徒が、自分の適性と希望をつかめていないのである。将来が最も早く決まる生徒が最も迷っている。このことは強調しておきたい。しかしこれには、別の解釈の余地も充分にある。就職が将来と生活のかなり大きな部分を決定してしまうことを考え、それが迫ってくるので、適性と希望の選択に迷いが生じているということも考えられるからである。目前に迫る就職が、悩みを深くしているという理解である。しかしこの理屈は、短大進学希望者の説明としては充分ではないように思える。

専門・各種学校進学希望者は、「適性把握○-目標発見○」が三分の一を越え(36.0%)、「適性把握×-目標発見×」(36.0%)に並ぶ。両者は等しくなっている。この傾向は、四年制大学希望者に近い内容であるが、四年制大学希望者では「適性把握×-目標発見×」が多くなり(39.5%)、「適性把握○-目標発見○」との差は10%近くひらく。四年制大学希望者のほうが、適性把握と目標を探す(モラトリアムの)ために進学を志しており、そのため「適性把握×-目標発見×」が多くなるのではないか。しかし取りあえず、専門・各種学校進学希望者が適性と目標をつかんで選択をしている者が多いことを強調しておきたい。「適性把握×-目標発見○」も考慮に入れると三分の二にせまる生徒が、自分のやりたいことを見いだしている<sup>17</sup>。

<sup>17</sup> しかし、この専門・各種学校進学希望者が進むのは、教育制度としては脆弱な基盤しかない専門・各種学校である。いわば最も意欲的な生徒が、困難な道を進むのである。ここに日本の教育制度の大きな問題がある。専

まとめると、進学が適性把握と目標発見を見いだすモラトリアムであると考えられそうなのは、短大進学希望者と四年制大学進学希望者であって、専門・各種学校進学希望者はこの二つの進路に比べて、自分の適性にあった目標を実現するために進学を希望しているといえそうだ。一方、就職希望者は迷ったまま就職を希望しているといつてよい。従来の就職と違ってじっくり育てられるのではなく、「そのまま役に立つこと」が強く求められるなかで、彼ら／彼女らの「自分さがし」と「やりたいことさがし」は、より困難に満ちているだろう。

## 2) 職業意識類型との関係

前節と同様な方法で、今度は「適性把握－目標発見」と職業意識類型のクロス分析を行なってみる(図表 12)。クロス表には、カイ二乗検定から 1% 有意で関連があることがわかった。また残差の検討も行なった。

それぞれのクラスターごとに数字をみてゆく。

「安定琢磨」型は、「適性把握×－目標発見×」が四つの類型のなかでは中位で、「適性把握○－目標発見○」がわずかだが多い。

「貢献琢磨」型は、「適性把握×－目標発見×」が圧倒的に少なく(16.3%)、逆に「適性把握○－目標発見○」が約半数を占めている(46.5%)。「適性把握×－目標発見○」も多い(32.6%)。主成分分析の第 1 成分が「適性把握－目標発見」に、ある具体的な形を与えることになっているのかもしれない。詳しくは第 7 章でのカテゴリカル回帰分析の結果にゆずるが、ここでは、「安定琢磨」型で「適性把握○－目標発見○」が多いこともその裏付けとして考えられることを指摘しておく。

「期待しない」型は、「適性把握×－目標発見×」が三分の二を越す(71.8%)。「適性把握○－目標発見○」は非常に少ない(17.9%)。「適性把握×－目標発見○」でさえも少なく(7.7%)、自分の「適性」も「目標」もわからないからこそ、「期待しない」になっているという連関があるように思える。

それなら逆に「すべて望む」型が、「適性把握○－目標発見○」が多いのかというと、そうで

図表 12 職業意識類型と「適性把握－目標発見」

			「適性把握」と「目標発見」				計
			×－×	×－○	○－×	○－○	
職業意識類型	「安定琢磨」型	(名)	23	15	1	17	56
		(%)	41.1%	26.8%	1.8%	30.4%	100.0%
	「貢献琢磨」型	(名)	7	14	2	20	43
		(%)	16.3%	32.6%	4.7%	46.5%	100.0%
「期待しない」型	(名)	28	3	1	7	39	
	(%)	71.8%	7.7%	2.6%	17.9%	100.0%	
「全て望む」型	(名)	28	16	3	9	56	
	(%)	50.0%	28.6%	5.4%	16.1%	100.0%	
計		(名)	86	48	7	53	194
		(%)	44.3%	24.7%	3.6%	27.3%	100.0%

※ 1 職業志向類型の判明したケース数のみあげてある。

※ 2 ×－×の表記は図表 11 と同様。

はない。ポジティブに「望んでいる」のではないことは、「適性把握○—目標発見○」が少ないことからよくわかる(16.1%)。「適性把握×—目標発見×」が半数と多く(50.0%)、だからこそ逆に「すべて望む」型になっているのではないかと考えられる。すなわち、「すべて望む」型のポジティブさは、適性や目標に答えが見つかっていないことに由来する。その意味で、「期待しない」型と「すべて望む」型は、表裏の関係にあるといえそうだ。

### (3) 何をみいだしたのか——労働条件と職業

上記のような迷いのなかで、彼ら／彼女らは、何を職業にもとめたのだろうか。ここでは就職希望者に限定されるが、職業選択で重視することや希望する職業について検討してみる<sup>18</sup>。

#### 1) 職業選択で何を重視するのか

職業を選択する時に生徒は何を重視するのであろうか(図表13)<sup>19</sup>。

回答が0であった「N 労働組合があること」を除いてカイ二乗検定を行なったが5%有意水準の関連は見いだせなかった。

全体的には、「B 仕事の内容・職種」が最も多く(66.1%)、次いで「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」(58.1%)、「I 賃金の条件がよいこと」(43.5%)と労働条件に関するものが選択されている。また「A 自分の技能・能力が活かせること」(38.7%)も比較的多

図表13 職業意識類型別の職業選択時に重視すること(就職希望者のみ、複数選択)

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	生徒数
		自分の技能・能力が活かせること	仕事の内容・職種	会社の規模・知名度	会社の将来性	仕事の社会的意義	会社が実力主義であること	通勤に便利であること	実家から通えること	賃金の条件がよいこと	労働時間・休日・休暇の条件がよいこと	勤務地	転動がない・転勤の地域が限定されている	福利厚生	労働組合があること	その他	
職業意識類型	「安定琢磨」型	(名) 12 (%) 54.5%	13 59.1%	1 4.5%	2 9.1%	1 4.5%	1 4.5%	0 0.0%	2 9.1%	11 50.0%	12 54.5%	2 9.1%	2 9.1%	1 4.5%	0 0.0%	1 4.5%	22 100.0%
	「貢献琢磨」型	(名) 6 (%) 66.7%	4 44.4%	0 0.0%	1 11.1%	1 11.1%	1 11.1%	0 0.0%	2 22.2%	2 22.2%	5 55.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 22.2%	9 100.0%
	「期待しない」型	(名) 3 (%) 14.3%	15 71.4%	1 4.8%	4 19.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 19.0%	5 23.8%	9 42.9%	14 66.7%	2 9.5%	4 19.0%	1 4.8%	0 0.0%	1 4.8%	21 100.0%
	「すべて望む」型	(名) 3 (%) 30.0%	9 90.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 50.0%	5 50.0%	4 40.0%	1 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100.0%
	計	(名) 24 (%) 38.7%	41 66.1%	2 3.2%	7 11.3%	2 3.2%	2 3.2%	4 6.5%	9 14.5%	27 43.5%	36 58.1%	8 12.9%	7 11.3%	2 3.2%	0 0.0%	4 6.5%	62 100.0%

<sup>18</sup> 希望職業の検討の前に、S市の職業の現実と比較しておく。

2000年度の国勢調査からS市の職業別(大分類)の就業者数をみる。S市の人口は約2万5千人で、そのうち約1万2千人が就業者である。

就業者中、生産工程・労務作業者が最も多く3192名(27.2%)、あとは順に、農林漁業作業者が2165名(18.4%)、事務従事者が1714名(14.6%)、専門的技術的職業従事者が1497名(12.7%)、販売従事者が1234名(10.5%)、サービス職業従事者が876名(7.5%)、となっている。北海道全体の職業別の就業者の割合と比べると、農林漁業作業者が多く(+10.8%)、販売従事者(△4.3%)や事務従事者(△2.9%)が少ない。

他方、2003年度S市内だけの就業者は1章2節の通りで、S市の就業者の職業別の内訳と比較して、生産工程・労務作業者(技能職)が少なく、そのため事務職と販売職の割合が多い形になっている。

<sup>19</sup> 選択項目は、「A 自分の技能・能力が活かせること」、「B 仕事の内容・職種」、「C 会社の規模・知名度」、「D 会社の将来性」、「E 仕事の社会的意義」、「F 会社が実力主義であること」、「G 通勤に便利であること」、「H 実家から通えること」、「I 賃金の条件がよいこと」、「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」、「K 勤務地」、「L 転動がない・転勤の地域が限定されている」、「M 福利厚生」、「N 労働組合があること」、「O その他」から、あてはまるものを三つ選んでもらった。

い。先取りすると、この項目の希望如何が類型の違いに重なる。逆に、選ばれていないということの特徴的なものが、会社に関わることである。「D 会社の将来性」(11.3%)はそれほどでもないといえるかもしれないが、「C 会社の規模・知名度」(3.2%)、「F 会社が実力主義であること」(3.2%)は少ない。また、地元志向と関係する「H 実家から通えること」(14.5%)や「K 勤務地」(12.9%)、そしてそれに多少似た「L 転勤がない・転勤の地域が限定されている」(11.3%)は、それほど大きな位置を占めていない。さらに「E 仕事の社会的意義」も少ない。

続いて職業意識類型を平均との比較の観点から特徴づける。

「安定琢磨」型は多少「A 自分の技能・能力が活かせる」が多い(54.5%)が、それ以外では平均的である。「B 仕事の内容・職種」、「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」、「I 賃金の条件がよいこと」がそろって50%を超えて選択されている。

「貢献琢磨」型は、「A 自分の技能・能力が活かせる」が多く(66.7%)、相対的に「B 仕事の内容・職種」が少ない(44.4%)。この点が「安定琢磨」型との一つ目の違いである。それ以外では「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」が平均的で、「H 実家から通えること」の多さ(22.2%)と「I 賃金の条件がよいこと」の少なさ(22.2%)が目立つ。この「I 賃金の条件がよいこと」の少なさが、「安定琢磨」型との二つ目の違いとなる。

「期待しない」型は、「B 仕事の内容・職種」がやや多く(71.4%)、「A 自分の技能・能力が活かせる」がかなり少ない(14.3%)。この点が特徴となっている。それ以外では「G 通勤に便利であること」(19.0%)、「H 実家から通えること」(23.8%)、そして「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」(66.7%)がやや多い。「期待しない」型というニックネームのこの型の希望は、仕事に自己表現は望まないけれども、基本的な労働条件は守ってほしい、とっていると考えることができよう。

「すべて望む」型は、「B 仕事の内容・職種」(90.0%)、「K 勤務地」(40.0%)、「I 賃金の条件がよいこと」(50.0%)で多く、相対的に「A 自分の技能・能力が活かせる」(30.0%)、「D 会社の将来性」(0%)、「H 実家から通えること」(0%)、「J 労働時間・休日・休暇の条件がよいこと」(43.0%)で少ない。「すべて望む」型というニックネームのこの型の希望は、Aが低い点とBが高い点が「期待しない」型と共通する。そしてKが高い。これは、前述したようにS市では希望職種と勤務地が結びついていたことから生じている。

まとめよう。職業意識の型の違いは、「A 自分の技能・能力が活かせる」の支持の仕方に表れているといつてよい<sup>20</sup>。そして逆説的でない方になるが、「期待しない」型と「すべて望む」型では、Aが選択されていないがゆえに、Bが重視されているともいえる。「トレードオフ」の関係にある。そしてこれが全体的に重視される条件であるIにも影響する。しかし、「安定琢磨」型と「貢献琢磨」型では影響の程度に違いがある。

高卒就職に関して最近よくいわれる「地元就職」は、この結果をみる限りとりわけ重視されているわけではないこともわかった。第2章第2節でも、労働市場の構造変化の結果としての「地元志向」であることを強調したが、それを意識面でも裏付ける結果となった。

<sup>20</sup>「安定琢磨」型と「貢献琢磨」型の核となっている「専門化志向」と労働条件の「A 自分の技能・能力が活かせる」の相関を調べたところピアソンの相関係数が0.320となった。関係があると判断してよい。

## 2) 職業は何を希望したか

同様に就職希望者を対象に、職業意識類型別に希望職種を検討する。

まず、3年生の職業希望はどうなっているのか確認しておく(図表14)。

全体的には、就職可能性が高い事務職希望者と販売職希望者がどちらも12名(24.0%)と多く、それに技能職希望者8名(16.0%)、サービス職希望者6名(12.0%)、保安職希望者6名(12.0%)が続いている。前年度実績より、技術・専門職希望者が少なく(△8.5%)、販売職希望者が多い(+7.9%)。しかし、大きなズレはない。例年の就職の動向を、進路指導の成果もあって、よく知っているというべきだろう。

次に、職業意識類型との対応をみる。

「安定琢磨」型は、販売職希望者が多い(36.8%)。これに技能職希望者が次ぐ(21.1%)。「貢献琢磨」型は、サービス職希望者が多い(37.5%)。専門職希望者も多い(12.5%)。「期待しない」型は事務職希望者と保安職希望者(共に33.3%)が多い。「すべて望む」型は、事務職希望者(41.2%)が特に多く、販売職希望者(23.5%)も多い。

就職可能性の高い販売職希望と事務職希望で職業意識類型の違いが表れている。この違いは、前項で述べた「A 自分の技能・能力を活かせること」の位置の違いに対応していることがわかる。「安定琢磨」型と「貢献琢磨」型が販売職とサービス職を、「期待しない」型と「すべて望む」型が事務職を希望している。すなわち「自分の技能・能力を活かせること」の職業的な対象、あるいは舞台として、「安定琢磨」型は販売職を、「貢献琢磨」型はサービス職とその他に求めたのだ。他方で「期待しない」型と「すべて望む」型は、「仕事の内容・職種」に注目し、事務職を希望した。この職種の選択が、就業地域の選択につながっていることは第2章に書いた通りである。事務職希望は、S市における就職希望につながり、サービス職希望が道内就職希望につながる。職業選択時に重視することで、「期待しない」型と「すべて望む」型が、勤務地に関する条件を重視したのもこのような理屈からである。

## 6. 生徒のフリーター評価と職業意識類型

高校生の職業観・勤労観が問題とされる時、念頭におかれるのは、フリーターの存在である。特に「進路多様校」は、フリーターを輩出する原因のひとつとしてみなされ、研究されてきた<sup>21</sup>。

図表14 職業意識類型別の希望職種(就職希望者のみ)

		専門職	事務職	技能職	販売職	サービス職	職人的仕事	運輸職	保安職	農林漁業の仕事	その他	計
職業意識類型	「安定琢磨」型	(名) 1 (%) 5.3%	2 10.5%	4 21.1%	7 36.8%	1 5.3%	1 5.3%	1 5.3%	2 10.5%	0 0.0%	0 0.0%	19 100.0%
	「貢献琢磨」型	(名) 1 (%) 12.5%	1 12.5%	1 12.5%	0 0.0%	3 37.5%	0 0.0%	0 0.0%	1 12.5%	0 0.0%	1 12.5%	5 100.0%
	「期待しない」型	(名) 0 (%) 0.0%	7 41.2%	2 11.8%	4 23.5%	2 11.8%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.9%	1 5.9%	0 0.0%	17 100.0%
	「すべて望む」型	(名) 0 (%) 0.0%	2 33.3%	1 16.7%	1 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	6 100.0%
計		(名) 2 (%) 4.0%	12 24.0%	8 16.0%	12 24.0%	6 12.0%	1 2.0%	1 2.0%	6 12.0%	1 2.0%	1 2.0%	50 100.0%

<sup>21</sup> 下村英雄(2000, 前出)。この研究では、6285名の高校生の調査を行なっている。このなかでフリーターを希

JIL 研究においても、進路多様校の生徒の職業意識にフリーターに通ずる要因の発見が目的となっていた。他方でS市の高校3年生の進路希望には、フリーターは少なかった(2名)。しかし、これはフリーターという身分に対する否定的な評価を意味しているのだろうか。当面、自分がフリーターになるとは考えていないものの、フリーターへの抵抗感は弱まったりしていないのだろうか。検討してみよう。

フリーターへの評価を、「A 働き口が減っているので仕方がない」、「B 自分がやりたいことを探すためには良いことだ」、「C 本人が無気力なせいだ」、「D 高校の進路指導が不十分なせいだ」、「E そのうちにきちんとした仕事に就く人が多いのでたいした問題ではない」、「F 夢を実現するためにフリーターをしている人はかっこいい」、「G だれでもそうなるかもしれない」という質問のそれぞれに、「1 とてもそう思う」、「2 ややそう思う」、「3 あまりそう思わない」、「4 全くそう思わない」の四つの回答からひとつを選んでもらった。

まず全般的な傾向を確認する(図表 15)。比較のために JIL 研究の数字をあげる。さらに職業意識類型との関係をカイ二乗検定で5%有意以上の関連のあったものにしばって検討する。

#### (1) 全体的な回答の特徴 — JIL 研究との違い

全体的な回答の特徴をみる。まず、フリーターが生じる原因に関する項目(A, C, D)についてみる。ここでは、「1 とてもそう思う」と「2 ややそう思う」を加え、肯定をまとめて考える。「A 働き口が減っているので仕方がない」では、肯定が82.6%にのぼる。フリーターの原因を働き口がないという経済的状况に求めている。しかし、それと対極にあると考えられる「C 本人が無気力なせいだ」においても、同様にみると60.7%にのぼる。どちらか片方に問題があるのではなく、両方が問題だと考えているわけだ。質的な差がどうなっているか興味あるところだが、この設問では不明である。「D 高校の進路指導が不十分なせいだ」は一転して少ない(22.5%)。学校の進路指導に満足しているともとれる。

JIL 研究と違いがでるのは、AとCである。「A 働き口が減っているので仕方がない」は、本調査の方が強くそう思っているようだ。「C 本人が無気力なせいだ」も本調査の方が強くそう思っているようだ。

次に、フリーターの評価についてみる。肯定的な項目(B, F)ではどうなっているのだろうか。「B 自分がやりたいことを探すためには良いことだ」では、61.2%が肯定している。「自分がやりたいことを探す」という延長線上にあるフリーターは、それが大変だとは知っているも、肯定されるものとしてある。他方、一般的にフリーターをもてはやす「F 夢を実現するためにフリーターをしている人はかっこいい」では、肯定が40.3%とそれほど高くない。しかし、フリーターを「かっこいい」と評価する生徒が40.3%いるのは、少なくないと考えた方がよいかもしれない。しかし実際の進路としてフリーターを志向するものが2名であることを考慮に入れるならば、自分のこととしてではなく、一般的に「夢を追求する」ことへの評価として「かっこいい」のだと、峻別している可能性がある。「やりたいことを探す」や「夢を追求する」は、これほどフリーターの問題が喧伝される状況でも否定しがたいものとして生徒に受け入れられている。

---

望している生徒は、774名(12.3%)とかなりの数になっている。またフリーターへの意識を調べる設問を参考にした。

図表 15 フリーターの評価（JIL 研究との比較）

			とてもそう 思う	ややそう思 う	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	計
A 働き口が減っている ので仕方がない**	本調査	(名) (%)	49 24.4%	117 58.2%	30 14.9%	5 2.5%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	1181 24.0%	2347 47.7%	976 19.8%	420 8.5%	4924 100.0%
B 自分がやりたいこと を探すためには良いことだ	本調査	(名) (%)	39 19.4%	84 41.8%	65 32.3%	13 6.5%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	1235 25.2%	1966 40.0%	1337 27.2%	372 7.6%	4910 100.0%
C 本人が無気力なせ いだ*	本調査	(名) (%)	39 19.4%	83 41.3%	69 34.3%	10 5.0%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	839 17.1%	1910 38.9%	1591 32.4%	567 11.6%	4907 100.0%
D 高校の進路指導が 不十分なせいだ	本調査	(名) (%)	15 7.7%	29 14.8%	119 60.7%	33 16.8%	196 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	260 5.3%	793 16.2%	2749 56.3%	1080 22.1%	4882 100.0%
E そのうちにきちん とした仕事に就く人 が多いのでたいした 問題ではない**	本調査	(名) (%)	12 6.0%	58 28.9%	111 55.2%	20 10.0%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	529 10.8%	1585 32.4%	2152 44.0%	629 12.8%	4895 100.0%
F 夢を実現するた めにフリーターをして いる人はカッコいい**	本調査	(名) (%)	22 10.9%	59 29.4%	70 34.8%	50 24.9%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	1137 23.2%	1435 29.2%	1501 30.6%	835 17.0%	4908 100.0%
G だれでもそうなる かもしれない**	本調査	(名) (%)	63 31.3%	78 38.8%	40 19.9%	20 10.0%	201 100.0%
	JIL 研究	(名) (%)	1121 22.9%	1727 35.3%	1503 30.7%	542 11.1%	4893 100.0%

注1) JIL 研究では N.A. が非常に多く比較が不正確になるため、この表では除いてある。

注2) 設問の後のアスタリスクは、カイ二乗検定の 5% 有意水準 (\*), 1% 有意水準 (\*\*\*) を表わしている。

JIL 研究と違うのは F である。JIL 研究の方が強く、「F 夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいい」と考えている。

フリーター問題が重要なことであるのかに関する項目 (E, G) について同様にみでみる。「E そのうちにきちんとした仕事に就く人が多いのでたいした問題ではない」は、34.9% と少なく、「たいした問題でない」とみていないことがわかる。同様に「G だれでもそうなるかもしれない」も 70.1% と高く、フリーター問題が他人事ではないと非常に身近に感じている。この二つは符合している。

JIL 研究とは両者とも違っている。「E そのうちにきちんとして仕事に就く人が多いのでたいした問題ではない」は、JIL 研究の方が強くそう考えている。「G だれでもそうなるかもしれない」では、本調査の方が強くそう考えている。

総じて、フリーターは就職口がないことに原因があるが、本人に責任の一端があると思っ  
ている。自分のやりたいことを探すという点からフリーターは肯定できるけれど、カッコいいとい  
われていた昔の評価と少し距離をとり、結構深刻な問題だと考えている。

JIL 研究との比較では、よりフリーターに厳しい考えを S 市の高校 3 年生はもっていること

がわかった。この点は、職業意識の類似と対照的になっている。フリーターが身近でないからそこ、世間に流布されているフリーターに対する厳しい評価を内面化しているといってもよいのかもしれない。しかしながら、「B 自分がやりたいことを探すためにはよいことだ」には違いがなく、自分のやりたいことを追求することに価値をおいている点では共通する。

## (2) 職業意識類型によるフリーター評価の違い

職業意識類型によってフリーター評価が異なったのは、C、Dのフリーターが生じる理由に關しての質問と、フリーターの評価に関するFである。Dがカイ二乗検定で1%有意水準の関連が、C、Fで5%有意水準の関連が確認できた。

まず、Cを検討する（図表16）。

「C 本人が無気力なせいだ」とフリーターの責任を本人に帰す考え方に対して、全部の類型が肯定している。しかしその程度は異なる。最も賛成しているのが、「すべて望む」型ので(70.2%)、それに「安定琢磨」型が続く(59.6%)が、ほぼ残りの2類型と並んでいる。肯定の中でも強いもの（「とてもそう思う」）に注目するとより特徴が明らかになる。「すべて望む」型では、およそ三分の一が「とてもそう思う」で、「安定琢磨」型で続くが(26.3%)、「貢献琢磨」型と「期待しない」型は少ない（それぞれ7.0%と5.1%）。

「すべて望む」型の職業への意欲の強さが、逆にフリーター評価で自己責任を問う形となっている。しかし、前項で検討したフリーターの原因では、「経済的な状況」と「本人の責任」が共に支持されていた。この点では「すべて望む」型も変わらない。「すべて望む」型の「A 働き口が減っているので仕方がない」への賛成は86.2%もある。

Dは、高校の進路指導の問題をあげたものであった（図表17）。賛成を大きい順にあげると、「すべて望む」型が40.0%と飛び抜けて高く、「期待しない」型が20.5%と平均的で、「貢献琢磨」型が14.3%、「安定琢磨」型が10.9%と低い。「すべて望む」型の自己責任の強調は、高校の進路指導への不満と両立している。そして「すべて望む」型は、フリーターの原因にすべて強く反応している。「すべて望む」型には、職業意識の主成分分析において抽出した第2成分（「転職獲得意識」）が存在していることを思い出していただきたい。この「獲得」の前提として進路指導に期待が高いといえるのではないか。また、「貢献琢磨」型と「安定琢磨」型が少ないのは、

図表 16 職業意識類型別のフリーター評価（「C 本人が無気力なせいだ」）

		「C 本人が無気力なせいだ」				計
		とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
職業意識類型	「安定琢磨」型	(名) 15 (%) 26.3%	19 33.3%	21 36.8%	2 3.5%	57 100.0%
	「貢献琢磨」型	(名) 3 (%) 7.0%	20 46.5%	16 37.2%	4 9.3%	43 100.0%
	「期待しない」型	(名) 2 (%) 5.1%	20 51.3%	16 41.0%	1 2.6%	39 100.0%
	「すべて望む」型	(名) 18 (%) 31.6%	22 38.6%	14 24.6%	3 5.3%	57 100.0%
計		(名) 38 (%) 19.4%	81 41.3%	67 34.2%	10 5.1%	196 100.0%

「進路は自分で考えるもの」という考え方をもっているからではないかと考えられる。

Fはフリーターをしている人への評価を問うた項目である(図表18)。これも賛成を多い順からあげてゆくと、「すべて望む」型(50.9%)、「期待しない」型(43.6%)、「貢献琢磨」型(41.9%)、「安定琢磨」型(24.6%)となる。ここでもやはり「すべて望む」型で、ほぼ半数の生徒が賛成していることがわかる。逆に、「安定琢磨」型は賛成が少ない。

全体を通してみると、次のことがわかった。フリーター評価において、「すべて望む」型は、特徴的な位置を占めている。

「すべて望む」型はフリーター評価に対して敏感に反応している。繰り返しになるが、フリーターが生まれる責任を「本人の無気力」や「進路指導の不十分さ」に求めている。一方でやりたいことを探すことにひかれ、それに価値をおくのであるが、他方でそれが生まれる環境については厳しく責めている。「すべて望む」型では、自分でフリーターになろうとは思わないが、フリーターが身近な存在、人ごとではないものとして感じられている可能性がある。進路でフリーターを希望者はしていた生徒は「すべて望む」型であるが、実際は2名しかいなかったこ

図表 17 職業意識類型別のフリーター評価(「D 高校の進路指導が不十分なせいだ」)

			「D 高校の進路指導が不十分なせいだ」				計
			とてもそう 思う	ややそう思 う	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	
職業 意 識 類 型	「安定琢磨」型	(名) (%)	1 1.8%	5 9.1%	40 72.7%	9 16.4%	55 100.0%
	「貢献琢磨」型	(名) (%)	0 0.0%	6 14.3%	26 61.9%	10 23.8%	42 100.0%
	「期待しない」型	(名) (%)	2 5.1%	6 15.4%	25 64.1%	6 15.4%	39 100.0%
	「すべて望む」型	(名) (%)	11 20.0%	11 20.0%	25 45.5%	8 14.5%	55 100.0%
計		(名) (%)	14 7.3%	28 14.7%	116 60.7%	33 17.3%	191 100.0%

図表 18 職業意識類型別のフリーター評価  
(「F 夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいい」)

			「F 夢を実現するためにフリーターをしてい る人はカッコいい」				計
			とてもそう 思う	ややそう思 う	あまりそう 思わない	全くそう思 わない	
職業 意 識 類 型	「安定琢磨」型	(名) (%)	5 8.8%	9 15.8%	22 38.6%	21 36.8%	57 100.0%
	「貢献琢磨」型	(名) (%)	2 4.7%	16 37.2%	16 37.2%	9 20.9%	43 100.0%
	「期待しない」型	(名) (%)	3 7.7%	14 35.9%	12 30.8%	10 25.6%	39 100.0%
	「すべて望む」型	(名) (%)	11 19.3%	18 31.6%	19 33.3%	9 15.8%	57 100.0%
計		(名) (%)	21 10.7%	57 29.1%	69 35.2%	49 25.0%	196 100.0%

ともそれを裏付ける。

「期待しない」型は、フリーターが生じる原因にあたるAとGが「すべて望む」型を上回りフリーターになることに対する不安がある。

他方で「貢献琢磨」型と「安定琢磨」型は、フリーターをあまり自分の身近に感じていないようだ。特に「安定琢磨」型でその傾向が強い。これには主成分分析の第3成分（経済的安定意識）が影響しているのかもしれない。

これまでに生じた疑問をカテゴリカル回帰分析によって解いてみたい。

## 7. 生徒の職業意識を決定しているものは何か

ここまで第4章～第6章に渡って職業意識類型をより深く理解するために、さまざまな要因を検討してきた。そのまとめとして本章では、職業意識に影響力のあるものは何であるのかを、統計的な手法を用い明らかにする。とはいっても直接に職業意識類型に影響力のあるものを検討することは統計手法的な限界からできない。職業意識類型自体が、統計操作の産物であるからだ。次善の方法として、職業意識類型をつくるために使った10の職業志向への回答（「1とてもそう思う」、「2ややそう思う」、「3あまりそう思わない」、「4全くそう思わない」）を従属変数とみなし、以下でふれる幾つかの項目にカテゴリカル回帰分析を行なうことで確かめたい。

注目する項目は、①「性別」（内訳は「男子」、「女子」。以下同様）、②「学校・コース」（A高校Aコース、A高校Bコース、B高校、C高校）、③「進路希望」（「就職希望」、「専門・各種学校進学希望」、「短期大学進学希望」、「四年制大学進学希望」、「フリーター希望」、「その他」、「未定」）、④友人数（「特にいない」、「1人」、「2～3人」、「4～5人」、「6～9人」、「10人以上」）、⑤定住希望（「S市に住み続けたい」か否か）、⑥「インターシップ体験の有無」（「行なった」、「行なわなかった」）<sup>22</sup>、⑦「アルバイト体験の有無」（「した、している」、「しなかった」）<sup>23</sup>、

<sup>22</sup> 学校別のインターンシップ実施状況をみる。具体的なインターンシップ先は、高校によって大きく異なっている。C高校では、ほとんどの生徒がインターンシップを行なう（88.9%）。その職種は、サービス職（50.0%）を中心に、生産工程・労務（25.0%）、技術・専門職（6.3%）、販売職（6.3%）、運輸職（6.3%）、農林漁業（6.3%）となっている。いろいろな業種にわたっている点に特徴がある。学校としてインターンシップに熱心に取り組んでいることがうかがえる。

B高校ではおよそ三分の二の生徒（69.5%）がインターンシップを行なっている。その職種は、学科の専門性が意識されており、販売職（65.9%）に集中する。それに生産工程・労務の22.0%とサービス職の12.2%が続く。A高校は、コースによって異なる。Aコースは、半数を少し下回る生徒がインターンシップを行なっている（44.4%）。その職種は技術・専門職に特化している（82.1%）。具体的な内容は、保育所・保育園・幼稚園における保育の実習である。それ以外では、生徒の希望を取り入れたもので、サービス職があるが例外的である。Bコースは、そもそもインターンシップを行なっている生徒が少ない（16.1%）。インターンシップ先の職種はAコースと同じく専門・技術職になるが、具体的なインターンシップ先として病院が加わる。

全体として、47.0%の生徒がなんらかのインターンシップを体験しており、インターンシップが高校教育に定着していることわかる。

生徒の進路との関係ではどうだろうか。

学校別の実施率よりも偏ることがないが、多い順に、就職希望者が67.2%、短期大学進学希望者が53.3%、専門・各種学校進学希望者が42.1%、四年制大学進学希望者が20.9%となっている。専門・各種学校進学希望者で、平均的なインターンシップ実施率（47.0%）を下回っている。そして就職希望者は多いが、それでもインターンシップを行なっていないものが三分の一弱いることがわかった。

<sup>23</sup> 職業意識に関わっている労働の経験にアルバイトがある。アルバイトを行なっている生徒数を学校・コース別に確認しておく。

全体的には55名（27.2%）の生徒がアルバイトをしている。この数は、大都市圏と比較して少ないものと思

そして進路指導に関係する項目として、⑧「進路指導室への訪問の有無」（「いったことがある」、「いったことがない」）、進路選択時の悩みであった⑨「自分がどんな仕事に向いているかわからない」（「とても感じた」、「少し感じた」、「あまり感じなかった」、「全然感じなかった」と）⑩「やりたいものがみつからない」（「とても感じた」、「少し感じた」、「あまり感じなかった」、「全然感じなかった」）、をとり上げた。

出身階層と成績（学校におけるメリトクラティックな達成）の影響もあるはずであるが、調査の制約上その問題にはふれることができなかった。また「友人数」は唐突な感じが否めないかもしれないが、友人関係の成功は自己肯定感にも大きく影響している。そのため入れてある。

分析の結果、10の要素志向のなかで分散分析の有意確率が0.05以下のものが8志向となった。これらを対象として分析する。

### (1) 職業志向を規定する要因 — カテゴリカル回帰分析の結果から

カテゴリカル回帰分析の結果、分散分析の有意確率が0.05以下の志向は、「A 仕事以外の生きがい志向」、「C 専門化志向」、「D 経済的成功志向」、「E 社会的名声志向」、「F 社会的貢献志向」、「G マイペース志向」、「H 安定志向」、「J 現在中心志向」の8志向であった。「B 若年転職志向」、「I 適性重視志向」の2志向は有意水準に達しなかった。

全体の傾向をみるために、主成分分析で明らかになった三つの意識、「貢献琢磨意識」と「転職獲得意識」、そして「経済的安定意識」にわけて整理してみよう。標準化係数 ( $\beta$ ) の有意確率 (P 値) が1%有意水準のものを中心にあげてゆく (図表 19)。

第一に「貢献琢磨意識」をみる。主成分分析の値が高かったものから順に検討しよう。また  $\beta$  値の符号は、数量化テーブルの値と関係するため、ここでは無視しておく。

「F 社会的貢献志向」は、「やりたいものがみつからない」の影響が非常に強い。それ以外では順に「友人数」、「学校・コース」、が上がっている。これに「アルバイト体験の有無」が5%有意で加わる。

「C 専門化志向」では、「やりたいものがみつからない」が飛び抜けて大きく、「進路」、「自分がどんな仕事に向いているかわからない」、「性別」が上げられた。

「A 仕事以外の生きがい志向」は有意確率が低いので省略し、「貢献琢磨意識」で否定的な

われる。学校・コース別には統計的には有意な差がある。B高校とC高校は、約4割の生徒がアルバイトをしている。A高校はアルバイトをしている生徒は少ない。コースによる違いはない。

アルバイトを行なっている時期は、学校・コース別に違いがある。全日制高校であるA高校とB高校は部分的に同様の傾向をもち、昼間定時制のC高校は全く違う。

長期休暇中のアルバイトが、A高校とB高校での中心的なアルバイトの形である。しかし、週末や平日となると、二つの高校で違いがでる。コースの違いも部分的に加わる。細かい点は省略して、B高校はA高校の週末のアルバイトで二倍、平日のアルバイトで三倍の比率の生徒が行なっている。

C高校は平日のアルバイトは、アルバイトを行なっている生徒の100%、全員である。労働と学業を両立しながら生活している姿がうかがえる。そしてその分、週末のアルバイトと長期休暇中のアルバイトが少なくなる。さらに職種についても確認しておく。これも学校・コース別にみる。分類のために用意した19職種で納まらない多様なアルバイトを行なっていた。

全体的に多いのは、サービス職業の「ウェイター・ウェイトレス」(23.5%)で、「その他」(15.7%)、生産工程・労務作業者の「現場作業(土木・建築)」(13.7%)、農林漁業作業者の「農作業」(13.7%)、販売職の「ファースト・フード店員」(11.8%)と続く。職業大分類で確認すると、販売職が22名(43.1%)と最多となっている。「貢献琢磨」型の生徒が、サービス職に自己表現の場を見いだそうとする根拠に、このアルバイトがあるのかもしれない。

図表 19 職業志向を規定する要因（カテゴリカル回帰分析）

	貢献琢磨意識								転職獲得意識		経済的安定意識					
	F 社会的貢献志向		C 専門化志向		A 仕事以外の生きがい志向		G マイペース志向		J 現在中心志向		E 社会的名声志向		H 安定志向		D 経済的成功志向	
	標準化係数		標準化係数		標準化係数		標準化係数		標準化係数		標準化係数		標準化係数		標準化係数	
	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値	ベータ	P値
性別	0.016		0.222	**	0.040		-0.098		0.090		0.305	**	0.062		0.156	*
学校・コース	-0.218	**	-0.116		-0.304	**	0.068		0.391	**	-0.157	**	0.147	*	-0.149	*
進路	0.101		-0.272	**	-0.094		-0.262	**	0.134	**	-0.301	**	0.201	**	-0.197	**
友人の数	-0.288	**	-0.119		-0.063		-0.042		0.117		-0.210	**	-0.339	**	-0.019	
S市に住み続けたい	0.109		0.053		0.112		-0.026		-0.071		-0.006		0.055		0.142	
インターシップ体験の有無	-0.045		-0.114		-0.138		-0.036		-0.005		-0.089		-0.143		-0.076	
アルバイト体験の有無	0.179	*	0.122		0.040		-0.113		-0.058		0.074		0.045		0.082	
進路指導室への訪問の有無	0.109		-0.018		0.350	**	-0.124		-0.155	*	-0.010		0.044		-0.036	
適性把握※2	0.099		0.244	**	0.037		0.090		-0.149	*	0.086		-0.051		0.317	**
目標発見※3	-0.337	**	-0.443	**	-0.152	*	0.374	**	0.276	**	0.125		0.243	**	-0.044	
調整済みR <sup>2</sup> 乗値	0.192		0.230		0.110		0.198		0.199		0.141		0.121		0.087	
有意確率	0.000(N=180)		0.000(N=180)		0.004(N=180)		0.000(N=180)		0.000(N=180)		0.001(N=179)		0.003(N=180)		0.018(N=180)	

- ※1 P値の\*は5%有意, \*\*は1%有意を表わしている。
- ※2 「自分がどんな仕事に向いているかわからない」への回答
- ※3 「やりたいものがみつからない」への回答

評価を受けた「G マイペース志向」をみる。これも「やりたいものがみつからない」の影響が大きく、これに「進路」が続く。

最後になるのが、「J 現在中心志向」である。これには飛び抜けて「学校・コース」が強く影響している。これに、「やりたいものがみつからない」、「進路」が続く。5%有意の項目では、「進路指導室への訪問の有無」と「自分がどんな仕事に向いているかわからない」が加わっている。

全体的には、「やりたいものがみつからない」の影響力が強く、これに「進路」と「学校・コース」が加わっているといつて良さそうだ。これに、「性別」、「友人数」、「アルバイト体験の有無」、「進路指導室への訪問の有無」、「自分がどんな仕事に向いているかわからない」がモザイク的に影響しているといえる。

続いて各カテゴリーの中でどの細目が影響しているのかを考えるために数量化テーブルのデータも考慮する。これによって、職業志向を規定する具体的な要因の検討ができる。「C 専門化志向」と「J 現在中心志向」にしばって述べる。

「C 専門化志向」をより強化する（数字を小さくする）のは、「専門・各種学校進学希望」（弱い「四年制大学進学希望」も）、「やりたいものがみつからない」を「全然感じなかった」（すなわち「やりたいことがみつかった」）が確認できる。逆に「C 専門化志向」をより弱くする（数字を大きくする）のは「女子生徒」、「自分がどんな仕事に向いているかわからない」を「感じない」が確認できる。

何よりも、やりたいことを見つけることが、「専門化志向」や「貢献琢磨意識」にかかわっていることが明らかになった。

「J 現在中心志向」も確認しておこう。「J 現在中心志向」をより弱めるのは、「C 高校」（弱い「A 高校 B コース」）、「短期大学進学希望」（弱い「専門・各種学校進学希望」も）、「やりたいものがみつからない」を「全然感じない」者が確認できる。ここでは逆に「やりたいものがみつからない」ことが非常に重要で、これに肯定的だと「J 現在中心志向」を回避で

きない。5%有意のものも入れると、「進路指導室にいったことがない」と「自分がどんな仕事に向いているかわからない」で「全然感じなかった」、「あまり感じなかった」、「少し感じた」が「J 現在中心志向」を強める力をもつ。

第二に「転職獲得意識」で、カテゴリカル回帰分析から関係性が検証できたのは、「E 社会的名声志向」だけであった。「E 社会的名声志向」では、「性別」、「進路」、「友人数」、「学校・コース」の影響が認められる。

数量化テーブルを確認しておくと、「E 社会的名声志向」を強める力をもつのは、「専門学校・各種学校進学希望」(弱い、「四年制大学進学希望」)、『友人数』が多い者、「C高校」(弱い「A高校Aコース」)が認められる。逆に弱めるのは「女子生徒」である。

最後に、「経済的安定意識」をみておこう。

「H 安定志向」は、「友人数」が飛び抜けて強く、「やりたいものがみつからない」、「進路」が影響している。「学校・コース」は5%有意水準になる。数量化テーブルを確認しておくと、「H 安定志向」を強める力をもつのは、『友人数』が多い者である。逆に弱める力をもつのは、「やりたいものがみつからない」を「感じなかった」者、「A高校Bコース」、「短期大学進学希望」と「就職希望」が認められる。

「D 経済的成功志向」では、「自分がどんな仕事に向いているかわからない」が強く、「進路」がそれに続く。5%有意水準では、「性別」と「学校・コース」が上げられる。数量化テーブルを確認しておくと、「D 経済的成功志向」を強めるのが「四年制大学進学希望」(弱い、「専門学校・各種学校進学希望」と「短期大学進学希望」)と「A高校」で、逆に弱めるのが「自分がどんな仕事に向いているかわからない」を「とても感じた」以外、「女子生徒」が認められる。

全体を通じてわかったのは職業志向が、「学校・コース」や「進路」だけではなく、「自分がどんな仕事に向いているかわからない」や「やりたいものがみつからない」などの自分の適性や目標の透明度、そして「友人数」等の様々な要因の影響下にあることだ。5%有意の要因を含めれば「アルバイト体験の有無」、「進路指導室への訪問の有無」(進路指導)も加わってくる全体的なものである。例えば、「進路多様校である」という単一の説明要因でいい尽くせるようなものではないことだ。そして「S市に住み続けたい」(「地元志向」)や、「インターンシップ体験の有無」は、職業志向に影響していなかった。

## 8. 生徒は学校に何を期待しているか

ところで就職の時期を迎えたS市の高校3年生は何を教わり足りないと思っているのだろうか。分析の最後に、このことを検討しよう。

進路を決める上で、「もっと教えてほしかったこと」を質問した(図表20)。設問は、「A 基礎学力」、「B 仕事に直接役立つ知識や技術」、「C 働く上で必要なビジネスマナーや礼儀」、「D 社会人になるための心構え」、「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」、「F 自分がどんな仕事に向いているか」、「G 世の中にはどんな職場があるか」、「H 地元でどのような職場があるか」、「I 高校の先輩がどういうところへ就職しているか」、「J 職業につくために必要な資格」、「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」、「L アルバイトやパートの仕事に関する情報」、「M 実際に職場で働く体験(インターンシップなど)」、「N その他」、「O 高校で教えてもらいたいことは特にない」である。これも就職希望者だけの設

図表 20 職業意識類型別の「もっと教えてほしかったこと」(就職希望者のみ)

職業意識類型	A 基礎学力		B 仕事に直接役立つ知識や技術	C 働く上で必要なビジネスマナーや礼儀	D 社会人になるための心構え	E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか	F 自分がどんな仕事に向いているか	G 世の中にはどんな職場があるか	H 地元にはどんな職場があるか	I 高校の先輩がどういうところへ就職しているか	J 職業につくために必要な資格	K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境	L アルバイトやパートの仕事に関する情報	M 実際に職場で体験(インターシップ)	N その他	O 高校で教えてもらいたいことは特にな	回答者																	
	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)																	
「安定琢磨」型	4	18.2%	12	54.5%	7	31.8%	6	27.3%	8	36.4%	7	31.8%	3	13.6%	4	18.2%	5	22.7%	8	36.4%	9	40.9%	6	27.3%	7	31.8%	0	0.0%	1	4.5%	22	100.0%		
「貢献琢磨」型	0	0.0%	4	44.4%	2	22.2%	1	11.1%	0	0.0%	2	22.2%	4	44.4%	4	44.4%	1	11.1%	2	22.2%	4	44.4%	3	33.3%	5	55.6%	4	44.4%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
「期待しない」型	2	9.5%	8	38.1%	7	33.3%	3	14.3%	5	23.8%	4	19.0%	6	28.6%	3	14.3%	5	23.8%	2	9.5%	6	28.6%	4	19.0%	3	14.3%	2	9.5%	1	4.8%	0	0.0%	21	100.0%
「すべて望む」型	2	20.0%	5	50.0%	3	30.0%	4	40.0%	6	60.0%	4	40.0%	5	50.0%	3	30.0%	4	40.0%	3	30.0%	2	20.0%	2	20.0%	3	30.0%	1	10.0%	2	20.0%	3	30.0%	10	100.0%
計	8	12.9%	29	46.8%	19	30.6%	14	22.6%	19	30.6%	17	27.4%	18	29.0%	13	20.0%	14	22.6%	20	32.3%	19	30.6%	20	32.3%	13	20.0%	14	22.6%	2	3.2%	3	4.8%	62	100.0%

間である。

質問は大括りをすると、「職業につくために必要な条件(学力、技術・知識、マナー・礼儀、心構え)」、「職業を選ぶための観点(注意事項、自己理解)」、「職業を選ぶのに必要な知識(職業の種類、地元の職場、先輩の就職先)」、「具体的な仕事の要件・待遇(必要な資格、労働条件、アルバイト)」、「仕事の体験」、「その他」、「教えてもらいたいことは特にな

い」は少ない(5%)。全体的には、「B 仕事に直接役立つ知識や技術」(46.8%)が高く、それに「J 職業につくために必要な資格」(32.3%)が続き、「C 働く上で必要なビジネスマナーや礼儀」(30.6%)、「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」(30.6%)、「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」(30.6%)が並ぶ。他方で「O 高校で教えてもらいたいことは特にな

い」は少ない(5%)。職業につくために必要な条件では、「A 基礎学力」や「D 社会人になるための心構え」ではなく、「C 働く上で必要なビジネスマナーや礼儀」もあるが、「B 仕事に直接役立つ知識や技術」が強く上げられている。職業を選ぶための観点では、「F 自分がどんな仕事に向いているか」ではなく、「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」が上げられている。職業を選ぶのに必要な知識では、「I 高校の先輩がどういうところへ就職しているか」が少なく、具体的な仕事の要件や待遇である「J 職業につくために必要な資格」や「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」が高い。

現在文部科学省の指導によって、学校において行なわれる「進路指導」を「キャリア教育」へ、名称だけでなく内容的な変更が進められている。そこでは生徒が自らの「生き方の探求」や「主体的に進路を選択決定」する能力を養うことがキャリア教育の目標とされている。具体的には、これからさらに厳しくなる就職で、どのような求人にも対応できるように、生徒の「意欲や態度、能力」を育てることが目標とされている。すなわち、内向きに、生徒の考え方を変えることが目指されているわけだが、それに比べると、生徒の学びたいことは職業に関する具体的な情報と知識や技能であり外側を向いている。食い違っているようだ。

職業意識類型別に「高校で教えてもらいたいこと」をみよう。

「安定琢磨」型は、平均的であるが、「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」(40.9%)がやや多く、「G 世の中にはどんな職場があるか」(13.6%)と「H 地元にはどんな

うな職場があるか」(18.2%)が少ない。「貢献琢磨」型は、平均よりも高い項目と低い項目が交錯している。「G 世の中にはどんな職場があるか」(55.6%)、「H 地元にはどのような職場があるか」(44.4%)、「J 職業につくために必要な資格」(44.4%)、「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」(44.4%)が高く、「A 基礎学力」(0%)、「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」(0%)、そして「D 社会人になるための心構え」(11.1%)が低い。職業選択のための観点は低く、職業選択のための知識とともに、具体的な仕事の要件が選択されている。「期待しない」型は、全般的に平均より低い数字となっているが、そのなかでも「K いろいろな職場の賃金や労働時間、職場の環境」(14.3%)、「M 実際に職場で働く体験(インターンシップなど)」(9.5%)、「I 高校の先輩がどういうところへ就職しているか」(4.8%)が低い。「すべて望む」型は、「すべて望む」というニックネームの通りになっている。その中でも「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」(60.0%)が高い。それ以外にも、「G 世の中にはどんな職場があるか」(50.0%)、「D 社会人になるための心構え」(40.0%)、「H 地元にはどのような職場があるか」(40.0%)が高い。「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」、「F 自分がどんな仕事に向いているか」の職業選択の観点とともに、「G 世の中にはどんな職場があるか」、「H 地元にはどのような職場があるか」、「I 高校の先輩がどういうところへ就職しているか」の「選択のための知識」が共に選ばれている。他の類型とかなり異なっている。

すなわち各類型で重視することは異なるが、「B 仕事に直接役立つ知識や技術」を中心に、付加的な性格で職業選択の注意事項(「E 仕事を選ぶ時にどんなことに注意すればよいか」)が、さらに職業を選ぶのに必要な知識(「G 世の中にはどんな職業があるか」と「H 地元にはどのような職場があるか」)がある。後者は譲れない要求でもあり、それに資格(「J 職業につくために必要な資格」)が重なってくる。

## 9. まとめ

これまでみてきたS市の高校生の職業意識をまとめてみよう。

まず生徒の職業意識は、強い順に「貢献琢磨意識」、「転職獲得意識」そして「経済的安定意識」からなっていた。ある意味で、生真面目な職業意識であった。JIL研究がフリーターと共通する意識として注目していたのは、「B 若年転職志向」であった。本稿でBと結びついていたのは、「転職獲得意識」である。若いうちに転職するのは、自分にあった仕事を見つけることであり、自分の出番を手に入れるためであった。

生徒の具体的な職業意識は四つの下位集団として理解できた。「貢献琢磨意識」の影響した二つの職業意識類型は、「貢献琢磨」型と「安定琢磨」型である。後者は「経済的安定志向」も結びついていた。残る二つは、全般的に職業意識の高い「すべて望む」型、逆に全般的に低い「期待しない」型である。先行研究で紹介した片瀬との違いという点では、生徒の中で「専門職志向」(ここでは「専門化志向」)にひかれているのは部分的であることだ。しかし職業意識を理解する上で「専門化志向」に注目するのは正しい。

そして進路探索における迷いは、適性把握と目標発見が難しいことにあった。そしてこの両者は、職業意識類型と深い関係もっていた。「貢献琢磨」型は、適性把握と目標発見がうまくできていた。「安定琢磨」型もそれに準じていた。しかし「期待しない」型は適性把握と目標発見

の両方がうまくいっていない。「すべて望む」型も同様であった。この二つの職業意識類型では職業意識の強弱が適性把握や目標表発見に関係していない。

また職業意識類型は、職業選択で重視することにも違いをもたらしていた。それは「自分の技能・能力が活かせる」ことを支持するかどうかで異なった。これを支持しない場合は「仕事の内容・職種」を重視する。トレードオフの関係があった。

「貢献琢磨」型と「安定琢磨」型では、仕事は自己表現のひとつの重要な場面であり、具体的な職業として販売職とサービス職を念頭に置いていた。逆に、「期待しない」型と「すべて望む」型は「仕事の内容・職種」にこだわっていたが、その職種は事務職であった。「専門化志向」でも望むのは専門職とは限らなかった。

このように生徒の職業意識は、ほぼ半数で「専門化志向」を軸とした具体的な形を取っている。残りの半数は悩みの中にあるが、その中でも「すべて望む」型の職業意識は強い。

学校教育に望むことも、「仕事に直接役に立つ知識や技術」を中心に、職業選択での注意事項や必要な知識、職業につくための必要な資格等が加わっている。

ところで政府は、高校新規学卒就職の問題も関わる「切迫した」事態に対応するため、2003年6月に省庁横断的政策である「若者自立・挑戦プラン」を打ち出した<sup>24</sup>。プランが問題としたのは、「若者の職業的能力の蓄積がなされ」ないために、日本経済の「中長期的競争力・生産性の低下といった経済基盤の崩壊」や「不安的就労の増外や生活基盤の欠如による所得格差の拡大、社会保障システムの脆弱さ」を引き起こしかねない危機的な状況である。

そこで文部科学省によって提起されたのが「キャリア教育」である。

具体的には「キャリア教育総合計画」として提案された。提案は四つの柱をもつが、中心課題は小学校からの児童・生徒・学生の「勤労観・職業観の醸成」である<sup>25</sup>。

一方での学校と労働をつなぐ仕組みの現状に追随した弾力化と、他方での生徒の意識への強い働きかけ、というギャップが現在の進路指導から「キャリア教育」への転換期の基礎構造を形作っている。すなわち、旧来の進路指導が「仕組み」に軸足を置いていたのだとしたら、「キャリア教育」は文字通り「教育」に軸足を置いている。

本稿の分析の結果からは、「キャリア教育」の方向とS市の高校3年生の必要としていることはずれている。「キャリア教育」を切実に必要とすると思われるのは一部の生徒である。その他の生徒はもっと具体的なことを求めている。キャリア教育の質的転換がもたれよう。

確かに、北海道S市の事例という限界があり、地方の高校生だから「健全」であるとの見方も捨てきれない。このことを検討するために、2005年に道東A市で六つの高校に同様の調査を行なった。特にそこでは、近年若者論の分野で議論されている自己の大きな変化の問題も組み込んだ形で、課題に迫りたいと考えている<sup>26</sup>。

最後になったが、青年就業問題の議論で筆者が支持するのは、学校現場が「生きる術」を教えるべきだという熊沢誠の議論である<sup>27</sup>。労働生活を「生きる術」は、職務の二極化構造が強まり、非正規化が進むなかで、「知識や技術を磨きたい」と願うS市の高校生にとっても必要不可欠である。

<sup>24</sup> <http://www.yef.jp/data6.pdf>

<sup>25</sup> [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/wakamono/](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/wakamono/)

<sup>26</sup> 浅野智彦編『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房 2006

<sup>27</sup> 熊沢誠『若者が働くとき 「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房 2006

学校が生徒の将来の職業生活を企業に全て委ねて「出口指導」を行えばよい時代は、確かに終わった。しかし、これからの労働市場の変化に適応するための教育をするにしても、その方向性には、再考の余地もあるのではないだろうか。そして本稿の分析からも、S市の高校生は学校に期待していた。